翻刻　京都女子大学図書館蔵『かなが き萬葉集』

凡　例

一、京都女子大学図書館蔵『かなが き萬葉集』を可能な限り原本に忠実に翻刻した。

一、翻刻に当たっては、次のような方法を採った。

1、一行の字詰、字の高さ、字の大小は概ね原本に従った。

2、漢字・仮名の区別をはじめ、宛字、仮名遣い、送り仮名、振仮名などは、すべてもとの通りとした。ただし、漢字・仮名の区別にあたり、本文が漢字原文か仮名書きか判断しかねる場合（例、二番歌「天乃香具山」の「乃」）、後考に備え、漢字で示した。

3、原本の誤字、脱字、衍字などはそのまま翻刻した。

4、漢字の字体は概ね校本万葉集の異体字表に準拠しつつ、原本の一々の場合に近い正字体または常用漢字字体にし、二、三原本の字体のままにした。

5、仮名字体は現行の仮名字体とし、ゾ・「はシテ・コトと改めた。

6、虫損、汚損などにより判読不能な場合は、□を以て示した。その際、原字の一部が見え、概ね判読可能な場合は、□右傍らに（　）括弧を設け、その文字を（カ）と注記した。

7、補入記号のある補入、あるいは見せ消ちによる文字の抹消は、概ね原本通りの体裁で示した。

8、消した文字は（　）括弧で囲み、その文字を（消・　）として示した。重ね書きによる訂正は、最後の文字をゴチック体で示し、原字は最後にまとめて列記した。

9、傍線、濁音符の朱書は頭に（朱）と注記した。

10、濁音符は概ね原本通りに記載した。

11、丁数は各表裏の区切りに」印を施し、その右に丁数を意味する数字と、オ（表）・ウ（裏）の略号を以て示した。

一、翻刻本文は、江富範子・小池麻美「翻刻　京都女子大学図書館蔵『かなが き萬葉集』㈠」～「同㈣」（『女子大国文』第百十九号～第百二十二号）をもとにし、今回、京都女子大学学術情報リポジトリとして公開するに当り、原本の再調査を行い、江富範子が作成した。校正に当たり、柴田清子氏の助力を得た。

一、最後に、貴重書の翻刻掲載を御許可くださった京都女子大学図書館及び閲覧・調査に際して種々御高配を賜った関係者各位に対し、深甚なる謝意を表する。

萬葉集巻第一

泊瀬朝倉宮御宇天皇代　太泊瀬稚武天皇

天皇御製歌

一

籠もよみ籠もちふくしもよみ
ふくしもち　此岳に菜採すこ兒
家きか　名つけさね虚見津
山路の國は　押なへて吾こそ居し
告なへて　吾こそをらし我こそは
背には告め　家をも名をも

舒明

高市岡本宮御宇天皇代　息長足日廣額天皇

天皇登二香具山一望レ國之時御製歌

1オ」

二

山常庭　村山ありと
取よろふ　天乃香具山
のほり立　國見をすれは
國原は　煙立たつ
海原は　かまめたちたつ
怜何國そ蜻嶋やまとの國は

舒明

天皇遊獵二内野一之時中皇命使下二間人連

老一献上歌

三

八隅知之　我大王乃
朝庭　取撫たまひ
夕には　いより立し

1ウ」

御執乃　梓弓乃
なか弭の　音すなり朝獵に
今立すらし　暮獵に今たゝすらし
御執の梓の弓のなか弭の音す也

反歌

玉剋春内の大野に馬數而朝ふま
すらん其草深野

同御宇

幸讃岐國安益郡之時軍王見レ山作歌

四

霞立長春日の晩にけるわつ肝しらす
村肝乃　心を痛み
奴要子鳥　卜なきをれは
珠たすき　懸のよろしく

2オ」

遠つ神　吾大王乃
行幸のゝ　山越の風の
獨座　吾衣手に
朝夕に　還ひぬれは
大夫と　おもへるわれも
草枕　客にしあれは
おもひやる　たつきを白土
網の浦の　海處女らか
やく塩のおもひそやくる吾下情

反歌

山越の風を時しみぬる夜不落
家にある妹をかけてしのひつ

六

2ウ」

右検日本紀無幸於讃岐國一亦
軍王未詳也但山上憶良大夫類聚
歌林曰記曰　天皇十一年己亥冬十二
月己巳朔壬午幸二于伊豫温湯宮一
一書曰是時宮前在二樹木一此之二
樹斑鳩比米二鳥大集時勅多
挂二稲穂一而養之乃作歌云若
疑従此便幸欤　三山者畝火　香具
中大兄近江宮御宇天皇　三山歌一首　耳梨
一三　高山は　雲根火をゝしと
耳梨と　相あらそひき

」3オ

天皇　詔内大臣藤原朝臣　競　憐
春山万花之艶秋山千葉之
彩一時額田王以レ歌判之歌
一六　冬木成　春去来れは
なかさりし　鳥も来鳴ぬ
さかさりし　花もさけれと
山を茂み　入てもとらす
草深み　とりてもみえす
秋山乃　木の葉を見ては
黄葉をは　取てそしのふ
青きをは　置てそなけく

」4オ

神代より　かゝるにあらし
いにしへも　然にありこそ
虚蟬も　嬬乎あひて
かくら思ひき
反歌
一四　高山と耳梨山とあひし時
立て見に来しいなひ國はら
一五　渡津海乃豊旗雲にいりひねし
今夜の月夜清明こそ
近江大津宮御宇天皇代

」3ウ

そこしうらみし秋山そ吾は
額田王下近江國一時作歌井戸
王即和歌
一七　味酒の　三輪乃山
青丹吉　ならの山の
山際　いかくるまて
道の隈　いつもるまてに
委曲も　見つゝゆかんを
數〳〵も　見放むやまを
情なく雲の隠障へしや
反歌

」4ウ

一八　三輪山を然もかくすか雲たにも
　　心あらなんかくさうへしや
　　明日香清御原天皇代天武天皇御製
二五　三吉野の　耳我嶺に
　　時無そ　雲はふりける
　　間なくそ　雨はふりける
　　其雪の　時なきことく
　　其雨の　ひまなきことく
　　隈も落す思つゝそ来る其山道を
　　過近江荒都時　人麿作
二九　玉手次　畝火の山の
　　櫃(消・櫃)原の　ひしりの御世より
　　あれまし、　神のあらはす
　　樛木の　いや継―嗣
　　天下　しろしめしゝを
　　天満　やまとをゝきて
　　あをによし　なら山をこえ
　　いつ方に　おほしめしてか
　　あまさかる　夷にはあれと
　　石―走　淡海の國の
　　楽浪乃　大津の宮に
　　天下　しらしめしけん
」5オ　5ウ

　　あめのした　しろしめしけん
　　すめろきの　神のみことの
　　大宮は　こゝときけと
　　大殿は　こゝといへとも
　　春草の　しけり生たる
　　霞立　春日のきれる
　　百礒城の大宮處見れは悲しも
　　反歌
三〇　楽浪しかのから崎雖幸有
　　大宮人の舩まちかねつ
三一　さゝなみのしかの大和太よとむとも
　　昔の人に又もあはめやも
　　幸于吉野宮之時　人丸
三六　やすみしゝ　わか大王の
　　きこしめす　天下に
　　國はしも　澤にあれとも
　　山□川の　清き河内と
　　御心を　吉野の國の
　　花散相　秋津の野へに
　　宮柱　ふとしきませは
　　百しきの　大宮人は
　　舩並て　旦川渡
」6オ　6ウ

舟競へ　夕河わたり
此川の　たゆる事なく
此山の　いや高からし
珠水の　たきのみやこは
みれとあかぬかも

三七　反歌見れとあかぬ吉野の川の常滑の
たゆる事なく又かへりみん

三八　やすみし、　わかおほきみの
神なから　神さひせすと
芳野川　たきつ河内に
高殿を　高知まして

」7オ

八　のほり立　國見をすれは
かさねたる　青垣山の
山神の　たつる御調と
春部には　花かさしもち
秋たては　もみちかさせり
ゆふ川の　神も大御食に
つかへまつると上瀬に鵜川を立て
下つ瀬に　小網さしわたし
山川も　よりてつかうる
神の御代鴨

反歌

」7ウ

三九　山川もよりてつかふる神なから
たきつ河内に舩出するかも

右日本紀三年正月天皇幸吉野宮
八月又幸　四年二月幸　五月幸
五年正月幸　四月幸　未詳知何月
従レ駕作歌

輕皇子宿于安騎野時　人麿

四五　八隅知之吾大王の高照日の皇子
神長柄　神さひせすと
ふとしける　京を置て
隠口乃　泊瀬の山は
真木たてる　荒山道を
石の根の　ふせ樹押靡

」8オ

四六　坂鳥乃　朝越座て
たまきはる　夕さりくれは
三雪ふる　阿騎の大野に
旗すゝき　四能をゝしなみ
草枕　たひやとりせす
むかしおもひて

短歌

四七　阿騎のゝにやとる旅人うちなひき
いもねらしやもいにしへおもふに
真草苅あら野にはあれと葉過去
君か形見の跡よりそこし

」8ウ

四八　東野の炎(ケフリ)たてる所見て
　　かへり見すれは月西没(カタフキヌ)

四九　日雙(ヒナラヒ)し皇子(ミコノ)命(ミコトノ)馬副(ムマナメ)て
　　御獵立師(タヽシ)斯時はくる(来向)

藤原宮之役民作歌　作者未詳

五〇　やすみしゝ　わかおほきみの
　　高照　日のわかみは
　　荒妙の　藤原かうへに
　　食(ヲシ)國を　めしたまはんと
　　都宮(ミヤコ)には　高(カ)知らんと
　　神なから　おもへるなへ(戸)に　9オ

一〇　天地(アメツチ)も　縁(ヨリ)て有(アレ)こそ
　　磐走(イハハシル)　あふみの國の
　　衣手の　田上山の
　　真木(マキ)佐苦檜(サクヒ)乃　嬬手(ツマテヲ)乎(タヲヤメノテヲ)
　　物のふの　八十氏河に
　　玉藻成(ナス)　浮へ流るれ
　　其乎(ソヲ)取(ル)と　さわく御民も
　　家わすれ　身もたなしらす
　　鴨自物(シモノ)　水に浮居て
　　吾(ワカ)作(ツクル)　日の御門に
　　しらぬ國より　巨勢ちより　9ウ

　　我國は　常世にならん
　　冒(フミ)おへる　あや(神)しき亀も
　　新代(アタラヨ)と　泉の河に
　　持越(モチコセ)る　真木の都麻(ツマ)手(テ)を
　　百不足　五十(イカ)日たにつくり
　　沂(ノホス)すらん　いそはくみ(久見)れは
　　神の隨(マ)にあらし(有之)
　　右日本紀曰朱鳥七年癸巳秋八月幸藤原
　　宮地八年甲午春正月幸藤原宮冬十二月
　　庚戌朔乙卯遷居藤原宮
　　持統天皇九年甲午十二月乙卯(六日)也

藤原宮御井歌　作者不詳

五二　やすみしゝ　わかおほきみの
　　高照す日のみこのあらたへの
　　藤井かはらに大御門はしめ賜(タマヒ)て
　　埴安(ハニヤス)の　堤(ツヽミ)のうへに
　　在立(アリタヽ)し　見(ミ)したまへれは
　　日本の　青香具山は
　　日経(ツネ)乃(ノ)　大御門(オホキミ)に
　　春の山路　しみさひたてり
　　畝火の　此みつ山は
　　日の緯(ヌキ)の　大御門に
　　みつ山と　山さひします
　　耳高の　青菅(アラスカ)山は
　　(消・背友(ソトモ)の　大(オホ)御門に)　10オ

背友の　大キ御門に
宜名ヘ　神さひたてる
名くは(細)しき　よしの丶やまは
影友の　大御門より
雲居にそ　遠くありける
高カ知ルや　天の御蔭カケ
天マ知や　日の御影の
水こそは　ときはにあらめ
御井の清水キヨ　短歌
藤原の大宮つかへあれせんや
處女(消・袖)ヲトメカ友ハしきりめすかも

11オ

一二

或本従二藤原京一遷二于寧楽宮一時歌

すへらきの　みことかしこみ
柔備尓之ヤハラヒシニキビニシ　家を(消・えら)ヒて
こもりくの　泊瀬の川に
舟うけて　我行河の
川隈の　八十阿クマ落す
万段ヨロツタヒモヽソ　かへりみしつ丶
玉桙の　道行くらし
青によし　楢ナラのみやこの
さほ川に　いゆきいたりて
我ね宿たる　衣の上に

七九

11ウ

朝月夜　さやか清に余見れは
栲タヘの穂に　夜の霜ふり
磐床イハトコと　川の氷こりて
さゆ冷る夜を　やむこともなく
かよひつ丶　つくれる家に
千代までに　来ますおほきみと
吾もかよはむ　反歌
青によしならの家には万代に
我もかよはむわするとおもふな

八〇

12オ

第二

柿本人麿從石見國別妻上来時歌二首并短歌

石見乃海　角ツノ浦廻を
浦無ナミと　人こそ見らめ
滷カタナミ無と滷一乍磯　人こそ見らめ
よしえヤし能　浦はなくとも
縦ヨシゑやし　滷一乍磯はなくとも
鯨イサナ魚とり　海ウナヒ邊をさして
和ニキたつの　あら磯のうへに
香カヲナル青生　玉藻奥津藻

一三一

12ウ

朝羽振（ハフル）　風こそよらめ
夕羽振　浪こそ来よれ
風のむた（共）　彼（カ）よりかくより
玉藻成（ナ）　依宿之妹（ヨリネシイモ）を　一云ハシキヨシイモカタモトヲ
露霜の　置（ク）てし来れは
此道の　八十隈ことに
万（ヨロツタヒ）―　かへりみすれと
いや遠に　里はさ（放）かりぬ
いや高に　山も越来ぬ
夏草の　おもひしなへて
しのふらむ　妹か門将（ミム）見

13オ

一四　麻（ナヒケ）此山　反歌二首

一三二　石見のや高角山の木のまより
　我ふる袖をいも見つらんか
一三三　小竹の葉はみ山も清（サヤ）にみたれとも
　吾はいもおもふわかれ来ぬれは
一三五　角障経（ツノサハフ）　石見の海の
　言さへく　辛（カラ）の碕（サキ）なる
　いくりにそ　ふかみるおふる
　荒磯にそ　玉藻はおふる
　玉藻なす　麻（ナヒキ）寐之兒（コヲ）乎
　深海松の　ふかめておもへと
　さぬる夜は　いくはくもあらす
　はふつたの　別しくれは

13ウ

肝向（キモムカフ）　心をいたみ
おもひつゝ　かへりみすれと
大舟の　渡（ワタリ）の山の
もみちはの　ちりのまかひに（乱）
いもか袖　さ（清）やにもみえす
つまこもる　屋（ヤ）上の　一云室（ムロ）上山　山の
くもりより　わたらふ月の
おしけれと　かくろひくれは
天傳（フ）　入日さしぬれ
ますらをと　おもへる吾も
しき妙の　衣の袖は

14オ

とをりてぬれぬる　反歌二首
一三六　青駒の足（ア）我きをはやみ雲居にそ
　妹をあたりを過てきにける
一三七　秋山におつるもみちは須臾（シハラク）は
　なちりみたりそ妹かあたりみん
或本歌一首并短歌
一三八　石見の海　津の浦をなみ（無）
　浦無跡（ナミト）　人こそ見らめ
　滷なみと　人こそ見らめ
　よしゑやし　浦はなくとも
　よしゑやし　滷はなくとも

14ウ

勇魚つり　海邊をさして
柔田津の　荒礒のうへに
蚊青生　玉藻おきつ藻
明来は　浪こそ来よれ
夕去は　風こそ来よれ
浪のむた　彼よりかくより
玉藻なす　靡我宿し
敷妙の　妹か手もとを
露霜の　置てし来れは
此道乃　八十隈毎に
よろつたひ　かへりみすれと

15オ

弥遠に　里放来ぬ
益高に　山も超来ぬ
早敷屋師　吾つまの兒か
夏草の　思ひしなへて
なけくとも　角のさと(消・みめ)
なひけ此ノ山　反歌

一三九　石見の海ウツタノ(消・□)山の木のまより
我ふる袖をいも(消・ににほひつらん)見つらんか
右歌躰雖同句〻相替因此重載
天皇崩時婦人作歌一首　姓氏未詳

一五〇　空蟬師　神にたへねは
はなれ居て　朝なけく君

15ウ

玉あらは　手に巻もちて
衣あらは　脱時もな
わかこふる　君そきその夜
夢にみえつる
太后御歌一首

一五三　鯨魚取　淡海の海を
奥放て　榜くる舩
邊に附て　榜来る舩
奥津かい　痛なはねそ
邊つかい　いたくなはねそ
若草の孺のおもふ鳥立

16オ

従山科御陵退散之時額田王作□(歌)一首

一五五　八隅知之　わか大王の
かしこみや　御陵まつれる
山科の　鏡の山に
夜るはも夜のつき　晝はも日の盡
哭にのみを　なきつゝありてや
百礒城の　大宮人はゆき別れなん
天皇崩時太后御作歌一首

一五九　八隅知之　我大王の
ゆふへには　召賜ふらし
明来は　問賜ふらし

16ウ

神岳の　山のもみちを　何方に　おほしめしてか　一八
けふもかも　問給はまし　神風の　伊勢の國は
あすもかも　召賜はまし　奥津藻も　靡し波に
其山を　振放見つゝ　塩氣のみ　香をれる國に
夕されは　あやにかなしみ　味凝りて　あやにともしき
明くれは　浦さひ晩　高照日のみこ

日並皇子尊殯宮之時　人丸　并短歌

あら妙の　衣の袖は乾時もなし　一六七　天地の　はしめし時の
天王崩之後八年九月九日奉為御斎會之
夜夢裏習　賜御歌一首古歌集中出
久堅の　天の河原に
一六二　明日香の　清御原の宮に　八百萬　千萬神の
天(消・下)下　しろしめし　神集　集いまして　17ウ
八隅知之　吾大王　高照日の王子に　17オ

神分　わかれし時に　天皇の　しきます國と
天照　日女之命　天原　石門をひらき
天ッをは　しろしめさむと　神あかり　あかりいましぬ
葦原の　水穂の國を　吾王の　皇子の命の
天地の　よりあひのかきり　天下　しろしめしせは
しらし行　神の命の　春花の　かしこからんと
天雲の　八重かきわけて　望月の　満はしけんと
神くたり　いましつかへし　天下　四方の人の
高照す　日の王子は　大舩の　おもひたのみて
飛鳥の　淨めし宮に　天ッ水　あふきて待に
神のまに　ふとしきまして　何方に　しろしめしてか　一九
18オ　18ウ

ゆへもなく（キ）　真弓の岡に
宮はしら　ふとしきまして
御あり香を　高（タカ）しりまして
あさことに　御言とはせす
日月の　あまたに成ぬ
其故に　皇子宮人（ミコノ）
行方（ユクエ）しらすも

一六八　反歌
久堅の空みることくあふきみし
皇子（ミコ）の御門のあれまくおしも

一六九　茜刺日はてらせともぬま玉の
夜わたる月のかくらくおしも
人麿献泊瀬部王女忍坂部王子歌

」19オ

一九四　一首并短歌
とふとりの　あすかの河の
のほり瀬に　おふる玉藻は
くたり瀬に　なかれふれ経（フ）る
玉藻なす　かよりかくより
なひきあひ（消・て）し　嬬の命乃（ツマノミコトノ）
多田名附　柔膚（ヤハハタ）すらを
つるきたち　身にそへねゝは
むは玉の　夜床も荒（アル）らん
そこゆへに　なくさめてける
敷藻相（シキモアフ）　やとゝおもひて

」19ウ

玉垂の　越（コス）の大野の
朝露に　玉裳はひちき
夕霧に　衣はぬれて
草枕　旅ねかもする
あはぬ君ゆへ　反歌一首

一九五　しきたへの袖かへし君玉垂の
越野（コシノ）を過て又もあはんやも
右或本曰葬河嶋王子越智野之時泊瀬
部王女歌也　日本紀曰朱鳥五年九月
己巳朔丁丑浄大参王子川嶋薨
明日香王女木殖殯宮之時　人麿作

一九六　飛鳥のあすかの河の上瀬に石橋（イハ）わたし

」20オ

くたり瀬に　打橋わたし
石橋に　生なひかせる
玉藻もそ　たゆ（絶）れはおふる
打橋に　おふるをす（為）れる
川藻もそ　かるれははゆる
何しかも　わかおほきみの
立たれは　玉藻のことく
ころふ（臥）せは　川藻のことく
なひきあひし　宜しき君か
朝（アサ）宮を　わすれたまふ（消・と）（や）
夕宮を　そむきたまふや

」20ウ

うつそみと　おもひし時に
春部には　花折かさし
秋たては　もみち葉かさし
敷妙の　袖たつさはり
鏡なす　見れともあかす
三五月の　いやめつらしみ
おもほえし　君と時〳〵
幸して　あそひたまひし
御食むかふ　木瓜宮を
常宮と　定めたまひて
味澤相　目辞も絶ぬ

」21オ

二二

しかあれ(消・と)も　あやに憐み
宿兄鳥の　片ー恋の嬬
朝鳥　かよひし君か
夏草の　おもひしなへて
夕星の　かゆきかくゆき
大舩の　たゆたふみれは
遣悶る　情もあらす
其故の　すへを知るしや
音のみも　名のみもたえす
天地の　いやとを長久
おもひゆかん　御名に懸世る

」21ウ

明日香川　万代までに
はしきやし　わかおほきみの
形見かこゝは　短歌二首

一九七　あすか川しからみわたしせかませは
なかるゝ水ものとにかあらまし

一九八　あすか川あすたにみんとおもへとも
わかおほきみの御名わすれせぬ

高市皇子尊城上殯宮之時

柿本朝臣人丸

一九九　かけまくもゆゝしけれともいはまくも
あやにかしこきあすかの真神原に

」22オ

久堅の　天つ御門を
かしこくも　定たまひて
神さふと　磐隠ます
八隅しゝ　わかおほきみの
きかしみし　そともの國の
真木たてる　不破山越て
狛錦　わさみか原の
行宮に　やすもりまして
天の下　治たまひて
食國を　定たまふと
とりかなく　あつまの國の

」22ウ

御軍を　めしたまひつゝ
ちはやふる　人を和為と
不奉仕　國をゝさむと
皇子は　隨任たまへは
大御身に　大刀とりはかし
大御手に　弓とりもたし
御軍士を　あともひ賜
齊る　鼓の音は
雷の　音ときくまて
吹響る　小角の音も
敵見有　虎かほゆると

」23オ

諸人の　おほゆるまてに
さしあくる　旗のなひきは
冬木なり　春去くれは
野へことに　著てある火の
風の共　なひくかことく
取持たる　弓はすの驟
三雪ふる　冬の林に
飈かも　伊巻わたると
おもふまて　聞かかしこく
引放　箭のしけゝく
大雪の　乱て来れ

」23ウ

不奉仕　立むかふしも
露霜の　けなはけぬへく
ゆく鳥の　あらそふはしに
渡會の　いつきのみやゆ
神風に　いふきまとはし
天雲を　日の目もみせす
常やみに　おほひ給ひて
定なし　水穂の國を
神の隨に　ふとしきまして
八隅しゝ　吾大王の
天下　申給へは

」24オ

万代に　然しもあらんと
木綿花の　さかゆる時に
わかきみの　皇子御門を
神宮に　装束まつりて
遣使　御門の人も
白妙の　麻の衣著
埴やすの　御門の原に
あかねさす　日のつくるまて
鹿自物　いはひふせつゝ
烏玉の　ゆふへになれは
大殿を　ふりさけみつゝ

」24ウ

鶉成（ナカコス）　いはひ廻（モトヲリ）

侍さもらへと　さもらひえねは

春鳥（ウクヒス）の　さまよひぬれは

なけきしも　いまたすきねはに

おもすも　いまたつきねは

言（コト）うへく　百済の原に

神葬（ハフリ）は　葬（ハフリ）いまして

朝もよひ　木のうへの宮を

常宮と　高し奉（タカ）まつりて

神の隨（マ）に　しつまりましぬ

しかれとも　吾大王の

万代と　きこしめしおほえつゝ

作（ツクラ）し、　かく山宮の

万代に　過（ン）とおもへや

天のこ（消・と）ふりさけみつゝ

玉たすき　懸てしのはん

かしこけれとも　短歌二首

二〇〇　久かたの雨にしらるゝ君ゆへに

日月もしらす恋わたるかも

二〇一　はにやすの池の堤の隠沼の

行方をしらす舎人はまとふ

二〇二　哭澤（ナキサハノモリ）神ー社（ニ）三輪すゑいのれとも

わかおほきみは高日しら□（れカ）ぬ

右一首類聚歌林曰檜ノ隈ノ女王怨泣澤ノ神社（ニ）之歌也

弓削王子薨時置始東人作歌　并短歌

二〇四　やすみしゝわかおほ君高てらす日の王子（ワカミコハ）

久方の天宮（アメノミヤ）に神隨（ノマニ）神といませし

それをしも文（アヤニ）かしこみ書日（ヒルハモ）ノ盡夜（ツキヨル）はも夜之盡（ノツキ）

臥居（フシキ）なけゝとあきたらぬかも

二〇五　王（オホキミハ）は神（ニモ）座（マセハ）天雲の五百重ノ下（ニ）隠レ賜（ヒ）ぬ

又

二〇六　神（サ）楽波のしかさゝれ浪しく〳〵に常（ニト）君（カ）おもへりける

柿本人麿妻死之後泣血哀慟作

二〇七　あま飛（天）や　輕（カル）の路には

わきも兒か　里におもへれは

ねもころに　見んとはすれと

やますいかは（行）　人目をおほみ

ま根（ネ）久ゆかは　人しりぬへみ

さねかつら　後もあはんと

大船乃　思たのみて

玉蜻（カケロウ）の　磐垣渕の

かくれのみ　恋つゝあるに

わたる日の　くれ行かこと

てる月の　雲かくること

奥津藻乃　なひきしいもは

黄葉はの　過ていゆく（伊去）と

玉桙の　使（ツカヒ）のいへは

梓弓聲（アヅヒ）ニきかれていはんすへせんすへ

しら（消・す）に声のみを聞てしありえねは

わかこふる　千重のひとへ（隔）も

おもひやる　心もあれはと

わきもこか　やます出見し

輕の市に　わかたちきけは

玉たすき　うねひの山に

なく鳥の　聲もきかれす

玉杵の　道行人も

ひとりたに　似てしいはねは

すへをなみ　いもか名よひて

袖そふりつる

短歌二首

二〇八　秋山のもみちをしけみ迷ぬる妹をもとめん山ちしらすも

二〇九　もみちはのちり行なへに玉梓(ツサ)のつかひをみれはあふ日おもほゆ

二一〇　打蟬と　おもひし時に
白妙の　天領(アマヒレ)巾こもり
取もちて　わかふたりみし
鳥自物(シ)　朝たちいまし
はしりての　堤にたてる
入日なす　かくれにしかは
槻木の　こち(己知)〳〵(慕智)の枝(エ)に
わきもこか　形見にをける
春の葉の　しけきかことく
若兒(みとり)の　こひなくことに
おもへりし　いもにはあれと
取あたふ　物のなけれは
たのめりし　兒らにはあれと
鳥穂自物(ホシモノ)　腋はさみもち
世間を　そむきしえねは
わきも子と　二人わかねし
蜻火(カケロワ)の　燎(モユ)る荒野に
枕付　つま屋のうちに
晝はも　浦不楽(フレクラシ)晩し
夜はも　氣衝あかし

なけゝとも　せむすへしらに
恋れとも　あふよしをなみ
おほとりの　羽かへの山に
わかこふる　いもはいますと
人はいへは　石根(イハネ)さくみを
名積(ナツミ)こし　よけく(古雲)もそなき
打蟬と　おもひし妹か
珠蜻(カケロウ)の　ほのかにたにも
見えすおもひは　短歌二首
二一一　こそみてし秋の月夜はてらせともあひみし妹はいやとしさかる
二一二　衾地(フスマチ)を引手の山に妹を置て山ちをゆけはいけ(生)りともなし
或本歌曰

二一三　宇都曽臣等(ウツソミト)
携手(タツサヘテ)　おもひし時に
出立し　吾(ワカ)ふたりみし
こち〳〵に　百兄(モエ)槻の木
枝させること
おもへりし　妹にはあれと
たのめりし　妹にはあれと
世中を　そむきしえねは
香切(カケロウ)火の　もゆるあら野に
白栲の　天領(アマヒ)巾隠(レコモリ)
鳥自物(トリシモノ)　朝たちい行て
入日なす　かくれにしかは

わきも子か　形見にをける
緑子の　乞哭別に
取委　物しなければ
男し物　腋はさみもち
わきも子と　ふたりわかねし
枕附　嬬屋のうちに
旦ハ浦不レ怜晩し夜ハ息つきあかし
なけゝとも　せんすへしらに
恋ふれとも　あふよしてな
大鳥の　羽かへの山に
汝恋ふる　妹ましますと

29オ

人いへは　石根割見て
なつみこし　好雲そなき
うつそみと　思しいもか灰れて
座は　短歌二首
二一四　去年みてし秋の月夜はわたれともあひみしいもは益年さかる
二一五　衾路を引出し山に妹を置て山路おもふにいけりともなし
二一六　家に来て吾屋をみれは玉床の外にむきける妹か木レ枕
吉備津采女死時柿本朝臣人丸作　并短歌
二一七　秋山の　したへる妹か
奈用竹の　とをよる子等は
いかさまに　おもひをりてか
拷紲の　長レ命を

29ウ

三〇

露こそは　朝にをきて
夕には　消といへ
霧こそは　夕にたちて
明には　失といへ　梓弓
音聞我も　髣髴ニみし事くやしきを
布栲の　手枕まきて
劔刀　身にそへ寐けん
若草の　其嬬の子は
さひしみか　おもひてねらん
くやしみか　おもひ恋らむ
時ならす　過にし子らか

30オ

朝露のことや　夕霧のことや
短歌二首
二一八　楽浪のしかつの子らかゆく道の川瀬の道をみれは□ひしも
二一九　天数凡津の子かあひし日をおほにみしかは今そくやしき
讃岐國狭岑嶋視石中死人人丸作并短歌
二二〇　玉藻よきさぬきの國は國からか見れともあかす
神柄かこゝたかしこき天地の日月とともに
満行かん神の御面次(消・来)来中の水門ゆ
舟うけて我こきくれは時つ風雲居ニ吹ニ
奥みれは跡位浪たちへをみれは白浪とよみ
いさなとる海をかしこみ行舟の梶引折て
をちこちの嶋はおほかれと名細狭岑の嶋の
荒礒面に　廬作て見れは
浪のをとの　茂き濱邊を
しきたへの枕になして荒床に自伏君か
家しらは行ても告ん妻しらは来ても問はましを
玉桙の道たにしらす欝レ悒く待か

30ウ

恋らむ愛妻等は

反歌

二二一　妻もあらは採てたきましさみの(消・山)野上のうはき過ニけらしや

二二二　おきつ浪来よるあら礒をしきたへの枕と巻てなせる君かも

志貴親王薨時作　并短歌

二三〇　梓弓 手にとりもちて ますらおの
得物や手狭 立ー向 高圓山に 春ー野焼
野火とみるまてもゆる火を いかにと
とへは 玉桙の(朱)道来人の なく涙(朱)霖霖
ふれは 白妙の 衣涅漬て 立とまり
我にかたらく いつしかも 本の名いひて
聞つれは ねのみしそなく かたらへは
心そいたき すめろきの 神の御子の
御駕の 手火の光そ 幾許照り

31オ

第三

長皇子遊獵路池之時人丸作并短歌

二三九　八隅知之吾大王の高光吾日の皇子の
馬並て　三獵に立る
わかくさを　かりちの小野に
しゝこそは　いはひ拝め
鶉こそ　いはひもとほれ
しゝし物　いはひふせらめ
鶉なす　いはひもとほり
かしこみと　仕へまつりて
久堅の　天みることく

32オ

たる

短歌二首

二三一　高圓の野への秋芽子いたつらに
さきかちるらんみる人なしに

二三二　御笠山野へ行道はこきたくも
しけくあれたるかひさにあらなくに

右歌笠朝臣金村歌集出

或本云

二三三　高圓の野への秋はきなちりそね
君かかたみにみつゝしのはん

二三四　三笠山野へゆ行道こきたくも
あれにけるかも久にあらなくに

第二終

31ウ

ます鏡　あふきてみれと
春草の　益めつらしき
わかおほきみかも　反歌

二四〇　久堅の天ゆく月を網にさし
わかおほきみは蓋にせん

又

二四一　皇神にしませは真木のたつ
荒山ー中に海をなすかも

鴨君足人香具山歌并短歌

二五七　天降付　天のかく山
霞たつ　春にいたれは
松風に　池浪たちて

32ウ

桜花　木の晩茂に
奥邊には　鴨妻よはひて
邊津方に　味村さわき
百礒城の　大宮人の
退いて、　あそふ舟には
梶棹も　なくて不楽も
こく人なしに　反歌二首
二五八　人不榜あら雲しるし潜する
　　鴦とたかへと舩の上に住
二五九　何時神さひけるかも香具山の
　　鋒椙か本に薜おふるまで
」33オ

二六〇　天降就　神の香具山
うちなひき　春さりくれは
桜花　木ノ暗しけみ
松風に　池浪飇
邊都邊ニハ　あちむら動
奥邊には　鴨妻よはひて
百式の　大宮人の
去出て　榜来る舟は
竿梶も　なくてさふしも
こかんとおもへと
右今案遷二都寧楽一之（消・憐）レ旧作欠
」33ウ

人丸献新田部皇子歌　并短歌
二六一　八隅しゝ　わかおほきみの
高てらす　日のわかみこの
しけます　大殿のうへに
久方の　天傅ひこし
雪しもの　ゆきつゝませ
とこ世なるまて　反歌
二六二　矢釣山木立もみえすちりまかふ
雪も驪にまゐくらくも
赤人望不盡山歌　并短歌
三一七　天地の　わかれし時に
」34オ

神さひて　高くかしこき
駿河なる　ふしのたかねを
天原　ふりさけみれは
わたる日の　かけもかくろひ
てる月の　光もみえす
白雲も　いゆきはゝかり
時しくそ　雪はふりける
語り告　いひ継ゆかん
ふしのたかねは　反歌
三一八　田兒の浦にうち出てみれは真白にそ
ふしのたかねに雪はふりける
」34ウ

詠不盡山歌　并短歌

三一九　なまよみの　甲斐の國には
うちよする　駿河の國と
こち〳〵の　國の三中(ミナカ)に
いて丶ある　ふしのたかねは
天雲も　いゆきは丶かり
飛鳥も　飛ものほらす
もゆる火を　雪もてきやし
ふる雪を　火もてけちつ丶
いひ(言)かねて　名をもしらす
霊母(アヤシタ)　座神(イマス)かも
」35オ

三二〇　ふしのねにふりをく雪は六月の
十五日にけぬれは其夜ふりけり
ふしのねを高見かしこみ天雲も
いゆきは丶かりたなひくものを

三二一　石(セ)花海(ノ)と　名つけてあるも
かの山の　つ丶める海そ
ふし河と　人のわたりも
其山の　水のあたりそ
日本の　山との國の
しつめとも　います祇(カミ)かも
寶とも　となる山かも
するかなる　ふしのたかねは
みれとあかぬかも　反歌
」35ウ

右一首高橋連虫麿歌

赤人至伊豫温泉作　短歌

三二二　皇神祖(スメロキ)の　神乃御言の
しきます國　之(シ)盡湯は霜(シモ)
さはにあれとも　嶋山の
よろしき國とこ丶しき伊豫のたかねの
射狭(イサ)庭の　岡にたちて
歌思(ヒ)　辞思(イフヒ)せし
三湯のうへの　樹村(コムラ)をみれは
臣(ヲミ)の木も　生(ヒ)継にけり
鳴鳥の　聲もかはらす
」36オ

三二三　百しきの大宮人の飽(ニキ)田津に
舟のりしけん年のしらなく
登神岳赤人作　并短歌

三二四　三諸山　神なひやまに
五百枝さし　し丶(繁)におひたる
とかの樹の　いや継嗣に
玉かつら　たゆる事なく
ありつつも　やますかよはん
あすかの　舊京(キミヤコ)師は
山たかみ　河とほしろし
」36ウ

とをき世□(にカ)　神さひゆかん
行幸(ミユキシトコロ)處　反歌

春の日は　山し見容之
秋の夜は　河四清けし
旦雲に　たつは乱レて
夕霧に　河津は驟く
みることに　ねにのみなかる
いにしへ思へは　反歌
三二五　あすか川河よとさらすたつ霧の
おもひ過へき恋にあらなくに
角鹿津乗船時　笠朝臣金村并短歌
三六六　こしの海の　角鹿ノ濱ゆ
大舟に　真梶貫下
勇ー魚取　海ー路にいて、

37オ

高座の　御笠の山に
朝さらす　雲居たなひき
容鳥の　間なくしはなく
雲ゐなす　心いさよひ
其鳥の　片恋のみに
晝ハも日の盡　夜ハモ夜のつき
立て居て　おもひそわかする
あはぬこゆへに　反歌
三七三　たかくらの三笠の山になく鳥の
やまは継る、恋もするかも
祭神歌　坂上郎女　并短歌
三七九　久堅の　天の原より

38オ

あへきつ、　わか榜ゆけは
ますらおの　手結か浦に
海未通女　塩やく炎
草枕　客にしあれは
獨して　見るしるしなみ
綿津海の　手に巻したる
珠たすき　かけてしのひつ
日本嶋根を　反歌
三六七　こしの海の手結の浦をたひにして
みれはともしみやまと思ひつ
登春日野　赤人　并短歌
三七二　春の日を　かすかの山の

37ウ

あれきたる　神のみことは
奥山の　賢木のしたに
白香付　木綿取付て
斎戸を　忌穿居
竹玉を　繁にぬきたれ
十六自物　膝折ふせて
手はやめの　押日とりかけ
かくたにも　吾は折なむ
君にあはぬかも　反歌
三八〇　木綿疊手にとりもちてかくたにも
われは恋なん君にあはぬかも
右歌天平五年供ニ祭大伴ノ氏神一ヲ之時作此歌
故曰ニ祭レ神歌一

38ウ

登筑波岳　丹比真人國人并短歌

三八二　（消・と）りかなくあつまの國に

高山は　さはにあれとも
あきつ神の　かしこき山の
ともたちの　見果石山と
神代より　人のいひ嗣
國見する　つくはの山を
冬木成　時敷時と
見すてゆかは　まして恋しみ
雪消する　山道すらを
名積そわか来る前|二　反歌

39オ

三八三　つくはねをよそに見なからありかねて
雪けの道をなつみくるかも
羇旅歌　魚麿

三八八　わたつみは　あやしき物か
あはちしま　中にたて置て
白浪を　伊与にめくらし
座待月　あかしのとには
ゆふされは　塩をみたしめ
あけつれは　塩をほさしめ
塩さゐの　浪をかしこみ
淡路しま　礒かくれ居て
いつしかも　此夜のあけなんと

39ウ

四〇

待ッよりに　いのねたへねは
瀧のうへの　浅野のきゝす
あけぬ年　立動良之
いさ兒|とも　あへて搒出ん
にはもしつけし　反歌

三八九　嶋つたひみぬめのさきをこきまへは
やまと恋しくたつ左波になく
石田主卒時—　丹生王　并短歌

四二〇　名湯竹の　十縁皇子
さにつらふ　わかおほきみは
こもりくの　はつせの山に
神さひに　いつきいますと

40オ

玉つさの　人そいひつる
およつれか　わか聞つる
まか言か　我聞つるも
天地に　くやしき事の
世|間の　くやしき言は
天雲の　そくへのきはみ
天地の　いたれるまてに
杖つきも　つかすもゆきて
夕|衢|召問　石卜もちて
我やとに　御諸をたてゝ
枕邊に　斎戸をすゑ

40ウ

竹玉を　まなくぬきたる
ゆふたすき　かひなにかけて
天にある　さゝらの小野の
七相菅　手にとりもちて
久かたの　天の川原に
出た(消・てり)潔身てましを
高山の　石穂の上に
いましつるかも　反歌二首

四二一　逆言之枉言とかも高山の
いはほの上に君かふしたる

四二二　石のかみふるの山なる杉むらの
思すくへき君にあらなくに

同石田王卒之時○哀傷歌　山前王

四二三　角障經　石村の道を
朝さらす　よりけん人の
おもひつゝ　かよひけましは
ほとゝきす　なく五月には
あやめくさ　花橘を
玉にぬき(二云貫マシヘ)　かつらにせむと
九月の　しくれの時は
黄葉ゝを　折かさゝむと
はふ葛の(二云田葛根の)　いや遠なかく(或云に)
万代に(二云大船のおもひたのみて)　たえしとおもひて
かよひけん　君をはあすより(二云君をあすよりは)

四二四　よそにかも見ん

右一首或云人丸作

或本反歌二首

こもりくのはつせ越女か手にまける
玉はみたれてありと(消・□)いはしやも

四二五　河風の寒きはつせをなけきつゝ
君かあるくに似る人もあへな

過勝鹿真間娘子墓　赤人(并短歌)

東俗語云可豆思
賀能麻末能弓胡

四三一　いにしへに　ありけん人の
倭父幡の(父)　帯とき替て
廬屋立　妻問しけ(消・り)(消・む)む
かつしかの　まゝのてこなか
奥槨を　こゝとはきけと

四二　真木の葉や　しけくあるらし
松か根や　遠く久しき
言のみも　名のみもわれは

四三二　わすられかたみ　反歌
われもみつ人にもつけんかつしかの
まゝのてこなか奥ツキところ

四三三　かつしかのまゝの入江にうちなひき
玉藻かりけんてこなしそ思

摂津國班田史生丈部龍麿自経死之
時判官大伴宿祢三中作歌　并短歌

四四三　天雲の　向伏國の
もの、ふと　いはれし人は
皇祖の　神の御門に

外重に立候　内重につかへ
玉かつら　いやとをなかく
おや○名も　継ゆく物と
母父に　妻に子等に
かたらひて　立にし日より
たらちねの　母のみことは
齋ー忌戸を　前にすへ置て
一手には　木綿とりもち
一手には　和細布
奉乎　間幸座と（消・前にすへ置）
天地乃　神に乞（消・うけ）ねき

」43オ

いかならん　年の月日か
茵花　香君か
牛留ー鳥　なつさひこんと
立居つゝ　待けん人は
おほきみの　みことかしこみ
をしてる　難波の國に
あら玉の　年ふるまてに
白たへの　衣かはかす
朝夕に　ありつるきみを
いかさまに　おもひましてか
うつ蟬の　おしき此世を

」43ウ

露霜の　置てゆきけん
時にあらすして　反歌

四四四　昨日こそ君はありしかおも（消・は）する
濱松のうへに雲とたなひく

四四五　何時然と待らんいもに玉杵の
事たに告すいぬる君かも

大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去歌并短歌

四六〇　拵角の　新羅國ゆ
人事を　吉ときかれて
問放流　親ー族兄ー弟
なき國從　わたり来まして
すめろきの　しきます國に
うち日さす　京しみゝに

」44オ

里家は　さは○あれとも
いつ方に　念けめかも
つれもなき　さほの山邊に
なくこ成　しのひ来まして
しきたへの　家をもつくり
あら玉の　年のを長く
すまひつゝ　いましゝ物を
いける人　死去といふ事に
まぬかれぬ　物にしあれは
たのめりし　人のこと〳〵
草枕　たひにあるまに

」44ウ

さほ川を　朝河わたり
春日野を　そむきにみつゝ
あしひきの　山邊をさして
ゆふやみと　かくれましぬれ
いはんすへ　せんすへしらに
たちとまり　たゝ獨して
白細の　衣手ほさす
なけきつゝ　わかなくなみた
ありま山　雲ゐたなひき
雨にふりきや　反歌

四六一　と、めえぬいのちにしあれはしきたへの
家をはいて、雲かくれにき
右新羅國尼名曰理願也遠感王徳帰化聖朝於
時寄住大納言大将軍大伴卿家既經数紀焉惟

45オ

四六　以天平七年乙亥忽沈運病既趣泉界於是
大家石川命婦依餌薬事往有馬温泉
而不レ會此喪但郎女獨留葬送屍柩既訖
仍作此歌贈入温泉

家持作歌一首　并短歌

四六六　我屋とに　花のさきたる
そを見れと　こゝろもゆかす
愛やし　妹かありせは
水鴨成　二人ならひゐて
手折ても　見せまし物を
うつ蟬の　かりの身なれは
霑霜乃　消行かことく
あしひきの　山ちをさして
入日さす　かくれにしかは

45ウ

そこおもひに　胸こそいため
いひもかね　名つけもしらす
跡もなき　世中にあれは
せんすへもなし　反歌

四六七　時はしもいつもあらんを心いたく
いゆくわきもかみとり子を、きて
いて、行道しらませは豫てより
四六八　いもをと、めんせきもをかましを
四六九　いもかみしやとに花さく時はへぬ
わかなく涙いまたひなくに

春二月安積皇子薨之時家持作歌六首

四七五　かけまくも　あやにかしこみ
いはまくも　齊忌しきかも
わか君の　御子のみことの
万代に　めしたまはまし

46オ

大日本　くにのみやこは
うちなひき　春さりぬれは
山邊には　花さきをせり
河瀬には　年魚小さはしり
いや日異に　さかゆる時に
逆言の　狂ことゝかも
白細に　舎人よそひて
わつか山　御輿立して
久かたの　天しられぬれ
展轉　泥打なけとも
せんすへもなし　反歌

四七六　わかおほきみ天しられんとおもはすは
おほにそ見けるわつかそま山
四七七　あしひきの山さへてりてさく花の
ちりゆくことき わかおほきみかも

右三首二月三日作

46ウ

四七八　かけまくも　あやにかしこし
わか君の　みこのみこと（皇子命）
物のふの　八十伴の男を
めしあつめ　いさなひたまひ
朝獵に　鹿（シ）猪、ふみおこし○
鶉鳩（トリ）ふみたてゝ大御馬（ミ）の　暮獵尓（ユフカリニ）
口抑駐（ヲサヘトメ）　御心（消・の）（と）見しあきらめし
活道（イクメ）山　木立（コタチ）の繁（シ）に
さく花も　うつろひにけり
世中は　かくのみならし
ますらをの（大夫）　心ふり（振）おこし
つるぎたち（劔）　腰にとりはき

」47オ

四七九　梓弓　靫（ユキ）とり負（ヲヒ）て
天地と　いや遠永（トワナカ）に
万代に　かくしもかなと
たのめりし　みこの御門の
さはへなす（五月蠅）　驟騷（サハク）とねりは
白拷に　服（コロモ）とりきて
常ありし　咲比（エマ）ふるまひ
いや日（弥）けに　かはら（更）ふみれは
悲しめんかも　返歌

四八〇　はしきかもみこのみことのありかよ（消・ふ）（ひ）
見し活道（イクメチ）の道はあれにけり
おほともの名におふゆきおひて万代に
たのみし心いつくにかよせん

悲傷死妻作　高橋朝臣作（并短歌）

」47ウ

四八一　白細の　袖さしかへし
なひきねし（寐）　わかくろかみの
真しらかに（白髪）　成きはまりて
あたら世に（新）　ともにあらんと
玉の緒の　たえしやいもと
むすひてし　事ははたさす（果）
思へりし　心はとけす（不遂）
白妙の　手もとをわかれ
丹杵（ニキ）火尓し　家をもいて、
緑子の　なくをも置て
朝霧の　ほのめかしつ、（彷彿）
山しろの　相楽山（さがらか）の

」48オ

山の際（マヲ）　行すきぬれは
いはんすへ　せんすへしらに
わきもこと　さねしつま（宿妻）屋に
朝には　出たちしのひ
夕には　入居なけくや（くや）
腋（挾）はさふ　兒（コ）の泣（カチシメハ）母
雄（ヲ）のしもの　負（ヲヒ）み抱（イタキ）み
朝鳥の　音のみなきつ、
恋ふ（れ）とも　しるし（効）をなみ（無）と
こと、は（消・す）（ぬ）物にはあれと（言不問）
わきもこか　入にし山を

」48ウ

よすかともおもふ　反歌

四八二　（消・うす）せみの世のことにあれはよそにみし
山をやいまは**よすか**とおもはん

四八三　朝鳥の音のみなかんわきもこに
今又さらにあふよしをなみ

三了

第四　岡本天皇御制　并短歌

四八五　神代より　生継くれは
人多に　國にはみちて
あちむらの　いさとはゆけと
わかこふる　君にしあらは

49オ

わきもこに　恋つゝをれは
明晩の　あさ霧かくれ
鳴たつの　ねのみしそなく
わかこふる　千重の一重も
なくさむる　心もあれやと
家のあたり　わかたちみれは
青旗の　かつらき山に
たなひける　しら雲かくれ
天さかる　ひなの國邊に
たゝむかふ　あはちを過て
粟嶋を　そむけに**み**つゝ

50オ

晝は日の　くるゝまちて
夜るは夜の　あくるきはみ
おもひつゝ　いもねか（消・たし）と
あかしつらくも長き此夜を

反歌

四八六　山の羽にあちむらさはきいぬなれと
われはさふしへ**君**にしあらねは

四八七　あふみちの鳥籠の山なるいさや川
氣のころ〳〵は恋つゝもあらん

丹比真人笠麿下筑紫國時
作歌一首并短歌

五〇九　臣女乃　くしけにのれる
鏡なす　みつの濱邊に
さにつらふ　紐ときさけす

49ウ

朝なきに　水手の音喚
夕なきに　梶のをとしつゝ
浪の上を　い行さくゝみ
磐の間を　い行もとおり
稲日つま　浦箕を過て
鳥し物　なつさひゆけは
家の嶋　あら磯のうへに
うちなひき　四時におひたる
なのりそか　なとかもいもに
つけすきにけん　反歌

五一〇　しろたへの袖とき更て歸りこん
月日をかそへて行てこましを

50ウ

安貴王歌一首并短歌

五三四　とをつまの　こゝにあらねは
玉杵の　道を多遠見
思ふ空　やすからなくに
なけくそら　やすからぬ物を
水空往　雲にも欲レ成
高く飛フ　鳥にも欲成
あす行て　妹にこと、ひ
我かために　いも、事なく
いもかため　我レも事なく
今もみること　副而も欲レ得

51オ

五三五　反歌
しきたへの手枕まかすへたて置て
年そへにけるあはぬおもひは

右安貴王娶二因幡八上采女一係念極甚
愛情尤盛於時勅断二不敬之罪一退二却本郷一
焉於是王意悼怛聊作二此歌一也

神亀元年甲子冬十月幸二紀伊國一之
時為レ贈二従レ駕人一所レ誂二娘子一笠朝臣
金村作歌一首并短歌

五四三　天皇之　行レ幸の随意
物部乃　八十伴の雄と
出去し　愛夫は
天翔や　輕ノ路より

51ウ

玉たすき　畝火を見つ、
麻もよひ　木道に入立
真土山　こゆらん君は
黄葉、の　ちり飛フ見つ、
したしくも　われはおもはす
草枕　たひをたよりと
おもひつ、　君はあらんと
あそ、には　かつはしれとも
しかすかに　もたへあらね(消・と)
わかせこか　ゆきのまに〳〵
をはんとは　千たひおもへと

52オ

手弱女　我身にしあれは
道もりの　とはんこたへを
いひやらん　すへをしらにと
立てつまつく　反歌
をくれゐておもひつ、あらすは木の國の
いもせの山にあらまし物を
わかせこかあとふみもとめをひゆかは
きの関守やいと、めんかも

五四四

五四五

二年乙丑春三月幸三香原
離宮之時得娘子作歌一首并短歌

笠朝〻金村

五四六　みかのはら　旅のやとりに
玉杵の　道のゆきあひに

52ウ

天雲の　よそのみ見つゝ
言とはん　よしのなければ
心のみ　むせつゝあるに
天地の　神ことよせて
しきたへの　衣手か易へて
わか妻と　たのめるこよひ
秋の夜の　百夜のなかさ
ある與宿鴨

五四七　あま雲のよそにみしよりわきもこに
心も身さへよりにし鬼を

五四八　このよはのはやくあくれはすへをなみ
秋の百夜をねかひつるかな

大伴坂上郎女怨恨歌一首并短歌

君もきまさす　玉杵の使もみえす
成ぬれは　いともすへなみ
ぬは玉の　よるはすからに
赤羅引　日もくるゝまて
なけゝとも　しるしをなしに
おもへとも　たつきをしらに
たをやめと　言くもしるく
手小童の　ねのみなきつゝ
徘徊　君かつかひを
待やかねてん　反歌

六二〇　はしめより長くいひつゝたのめすは
かゝるおもひにあはまし物か
（従元）

六一九　をしてるや　難波の菅の
ねもころに　君かきゝにしを
年ふかく　長くしいへは
まそ鏡　磨し心を
ゆるしてし　其日の極
浪のむた　なひく玉藻の
かにかくに　心はもたし
大舩の　たのめる時に
ちはやふる　神や将レ離
空蟬の　人か禁らん
（消・人か禁らん）かよひせし

第五

山上臣憶良詠二鎮懐石一一首
見二序部一署之

〔重ね書きによる訂正〕。

3オ4　**午**――モト「干」。
5ウ1　**橿**――原字不明。
9オ4　**斯**――モト「期」書キ止シ。
11ウ1　**従**――モト「徒」。
17オ6　**さ**――原字不明。
22オ9　**柿**――モト「抒」カ。
28オ11　**け**――原字不明。
30ウ3　**らか**――モト「ラカ」カ。
5　**人**――原字不明。
31オ3　**山**――原字不明。
ウ4　**ち**――原字不明。
32オ6　**フ**――モト「カ」カ。
11　**る**――モト「つ」。
36ウ12　**ろ**――モト「る」カ。
37オ3　**雲**――原字不明。
37ウ2　**浦**――モト「渡」書キ止シカ。
9　**の**――モト「の」。ナゾリ書キ。
39オ2　**と**――原字不明。
41オ4　**ナ**――モト「コ」カ。
ウ5　**を**――モト「を」カ。
6　**き**――原字不明。
42オ12　**父**――原字不明。
43ウ9　**き**――原字不明。
44ウ10　**め**――原字不明。
45オ1　**朝**――原字不明。
45ウ2　**餌**――モト「飾」カ。
46オ6　**か**――モト「こ」。
48ウ5　**や**――モト「や」。ナゾリ書キ。
6　**ふ**――モト「に」カ。
49オ3　**よすか**――モト「よすか」。ナゾリ書キ。
10　**け**――モト「を」カ。
49ウ7　**君**――モト「君」。ナゾリ書キ。
50オ11　**み**――モト「つ」カ。
52ウ8　**や**――モト「か」。

第（消・五）十五

古挽歌一首并短歌

三六二五

ゆふされは　あしへにさわき
あけくれは　おきになつさふ
かもすらも　つまとたくひて
わかみには　しもなふりそと
しろたへの　はねさしかへて
うちはらひ　さぬとふもの を
ゆくみつの　かへらぬことく
ふくかせの　みえぬかことく
あともなき　よのひとにして
」1オ

おほふねに　まかちしゝぬき
からくにゝ　わたりゆかんと
たたむかふ　みぬめをさして
しほまちて　みをひきゆけは
おきへには　しらなみたかみ
うらまより　こきてわたれは
わきもこに　あはちのしまは
ゆふされは　くもゐかくりぬ
さよふけて　ゆくゑをしらに
あかこゝろ　あかしのうらに
ふねとめて　うきねをしつゝ
」2オ

わたつみの　おきへをみれは
いさりする　あまのをとめは
小舟のり　つらゝにうけり
あかときの　しほみちくれは
あしへには　たつなきわたる
あさなきに　むなてをせんと
舩人も　かこもこへよひ
にほとりの　なつさひゆけは
いへしまは　くもゐにみえぬ
あかもへる　こゝろなくやと
はやくきて　みんとおもひて
」2ウ

わかれにし　いもかきせてし
なれころも　そてかたしきて
ひとりかもねん

反歌

三六二六

たつかなきあしへをさして飛わたる
あなたつ〳〵しひとりさぬれは

右丹比大夫悽愴己妻歌

属物發思歌一首并短歌

三六二七

あさゝれは　いもか手にまく
かゝみなす　みつのはま備（ヒ）に
」1ウ

おほふねを　こきわかゆかは
おきつなみ　たかくたちきぬ
よそのみに　みつゝすきゆき
たまのうらに　ふねをとゝめて
はま備(ヒ)より　うらいそをみつゝ
なくこなす　ねのみしなかゆ
わたつみの　たまきのたまを
いへつとに　いもにやらんと
ひりひとり　そてにはいれて
かへしやる　つかひなけれは
もてれとも　しるしをなみと
」3オ

たゝまかも　あやまちしけん
あきさらは　かへりまさんと
たらちねの　はゝにまをして
ときもすき　つきもへぬれは
今日かこむ　明日かもこんと
いへひとは　まちこふらんに
とほのくに　いまたもつかす
やまとをも　とほくさかりて
いはかねの　あらきしまねに
やとりする君

反歌二首

三六二八
たまのうらのおきつしらたま此利敝(ヒリヘ)礼杼(レト)
またそおきつるみる人をなみ

三六二九
あきさらはわかふねはてんわすれかひ
よせきておけれおきつしらなみ

到壹岐嶋雪連宅満忽遇鬼
病死去之時作歌一首并短歌

三六八八
すめろきの　とほのみかとと
からくにゝ　わたるわかせは
伊敝(イヘ)ひとの　いはひまたねか
」3ウ

またおきつるかも

反歌二首

三六八九
いはた野にやとりするきみいへひとの
いつらとわれをとはゝいかにいはむ

三六九〇
よのなかはつねかくのみとわかれぬる
君にやもとなあかこひゆかん

右三首挽歌

三六九一
□□(ツチ)天地等　ともにもかもと
おもひつゝ　ありけんものを
はしけやし　いへをはなれて
なみのうへゆ　なつさひきにて
あらたまの　月日もきへぬ
かりかねも　つきてきなけは
」4ウ

やとりする君

反歌二首
」4オ

たらちねの　は、もつまらも
あさつゆに　ものすそひつち
ゆふきりに　ころもてぬれて
さきくしも　あるらむことく
いてみつ、　まつらむものを
世間の　ひとなけきは
あひおもはぬ　君にあれやも
あきはきの　ちら敝流野邊の
はつを花　かりほにふきて
くもはなれ　とほきくにへの
つゆしもの　さむき山邊に
やとりせるらん

反歌二首

三六九二　はしけやしつまもことも、たか〳〵に
まつらんきみやしまかくれぬる

三六九三　もみちはのちりなん山にやとりぬる
君をまつらんひとしかなしも

右三首葛井連子老作挽歌

三六九四　わたつみの　かしこきみちを
やすけくも　なくなやみきて
いまたにも　もなくゆかんと
ゆきのあまの　ほつてのうらへを
かたやきて　ゆかんとするに
いめのこと　みちのそらちに
わかれするきみ

反歌二首

三六九五　むかしよりいひけることのからくにの
からくもこ、にわかれするかな

三六九六　新羅奇へかいへにか、へるゆきのしま
ゆかんたときもおもひかねつも

右三首六鯖作挽歌

第十六

昔有二老翁一号曰二竹取翁一也此翁秀
春之月登レ丘遠望忽値二煑レ羹之九一
箇女一子一也百嬌無レ儔花容無レ止于時
娘一子等呼老翁嗤曰叔一父来乎吹一
此燭火一也於是翁曰唯一〻漸趍
徐行著接二座上一良久娘子等皆
共含レ笑相一推讓レ之曰阿誰呼二此一翁一哉
尒乃竹取翁謝レ之曰非慮之外偶逢一
神一仙一迷惑之心無二敢所レ禁近押之罪
希贖以歌即作歌一首　并短歌

三七九一　緑子之　若子蚊見庭
垂乳為　母　所レ懐
たまたすき　はふこのかみには

むすふかたきぬ　ひつりにぬひき
結経方衣　水津裏縫服

頸著之　うなひ子かみには
クヒツキノ　童子見庭

ゆふはたの　そてつき衣
結幡　袂著

きしわれを　によれる子らか
四千庭三　因

よちにはみなし　つらなるか
綿紋

くろなる髪を　まくしもち
黒　信櫛持

こゝにかきたれとりつかねあけてもまきみ
垂取束拳　纏見

とき乱れ　うなひこになれる
解　童兒

見羅丹　つかふる色に
ミツラニ　ミツラカニ

名つけくれ　紫の大綾の衣
著来　アヤ

墨江の　遠里小野の

」7オ

霖禁　ぬひし黒沓
ナカメイミ

さしはきて　庭にたちすみ

いてなたち　いさめをとめか
退莫立

ほのきゝて　我にそこしみ

はなたの絹の　帯を引帯なれる
ヒキ

から帯にとらし　海神之殿蓋に
韓取　ワタツミノトノヘミカサ

飛かける　すかるのことき
為輕

腰ほそに　とりてかさらひ
紡

まそかゝみ　とりなみかけて
取雙

をのかみの　かへらひ見つゝ

春避て　野へをめくれは
サリ

」8オ

真榛もて　にほしゝきぬに

狛錦　紐にぬひつけ

刺部重部波累　服てうちそやし
サシヘカサネヘナミカサネ　キ

麻績兒等　蟻衣之　寶のこらか
ヲミノコラ　アリキヌノ　タカラ

うちたへは　へて織布を
經ル

日にさらし　朝手つくらひ

しきもなせは　しきにとりしき

やとに經て　いねすをとめか
稲寸丁女

妻とふと　我にそ来にし
レ　キ

をちかたの　ふたあやうらのくつ
ニ綾裏香

飛鳥の　あすかおとこか
トフトリ　壯

」7ウ

おもしろみ　われをおもふか

さのつ鳥　きなきかけらふ
狭野翔

秋さけて　山邊をゆかは

なつかしと　われをおもふか

天雲も　行たなひきて

かへりたち　路をくるには

うちひさす　宮を見てもな

刺竹の　舍人壯も
トネリオトコ

しのふらひ　かへらひ見つゝ

誰か子そとや　思てあらむ

かくそしこし　古部さゝきし我や
イニシヘノ狭ゝ

」8ウ

六六

はしきやし　今日やもこらに　玉梓乃　つかひもこすは
いさにとや　おもひてあらむ　おもひやむ　我身ひとつそ
かくそしこし　古部之賢人も　ちはやふる　神にもおほすな
後の世の　かたみにせんと　うらへすへ　亀もなやきそ
老人を送りし車もちかへりこね　恋しくに　いたむ吾身そ
反歌二首
三七九二　しなはこそあひみすあらめいきてあらは　いちしろく　身に染てほり
しら髪子等におひさらめやも　むら肝の　心くたけて
三七九三　しら髪せむ子等もいきなはかくのこと　死なん命　にはかになりぬ
わかけん子等にのらんかねめや　今さらに　君か吾をよふ
戀夫君歌一首并短歌　たらちねの　母の御ことか
三八一一　さにつらふ　君か三言と　百たらす　八十の衢に

夕占にも　卜にもそ問
死なん吾之歌
三八一二　反歌
卜部をも八十のちまたも占とへと
君をあひみる多時しらす（消・も）
三八一三　或本反歌
吾命おしくもあらすさにつらふ
君によりてそなかくほりする
右傳云時有娘子姓車持氏也其夫久逕
年序不作往来于時娘子係戀傷心沈臥
痾疹痩羸日異　忽臨泉路於是遣使
喚其夫君来而乃歔欷流涕口号斯歌
登時逝歿也

三八七五
琴酒を　をしたれ小野に
いつる水　ぬるくはいてす
寒水の　心もけやに
おもほゆる音の　すくなき道に（消・と）
あひぬ鴨　すくなきよ道に
あへるさは　いろけせる菅笠小笠
吾宇なける　珠のなゝつを
とりすても　まうさん物を
すくなき道にあひぬかも　右歌一首

能登國歌三首

三八七八

はしたての　くまきのやらに
しらきをの　おとしいるゝわし
かけてかけても　な鳴しそね
うき出るやとはた見てんわし
右歌一首傳云或有愚人斧堕海底而不
レ解二鐵沈無レ理レ浮レ水聊作此歌口吟為レ喩也

三八七九

はしたての　くまき酒屋に
(消・あ)のらるのわし　さすひたち
いてきなましを　まのらるのわし
右一首

三八八〇

そ(消・め)たねの　つくゑのしまの
其皮を　たゝみにさして
八重疊　平郡乃山に
四月とか　五月のほとに
薬獵　ゆかふるときに
あしひきの　此かた山に
ふたつたつ　いちひかもとに
梓弓　八多はさみ
ひめかふら　八多はさみ
しゝ待と　吾居時に
さをしかの　きたちきなけく
たちまちに　われしにすへし

11オ

12オ

をたゝみを　いひろひもてきて
石もちて　つゝきはふり
早川に　あらひすゝき
から塩に　こゝともみ
高坏にもり　つくゑにたてゝ
母にまつりつや　みめちこのまけ

三八八五

乞食者詠二首

いとふるき　名あにの君は
おり〳〵て　物にいゆくとは
から國の　虎といふ神を
いけとりに　八頭とりもちてき
おほきみに　われはつかへん
わか角は　御笠のはやし
吾耳は　御墨の坩に
吾目らは　ますみのかゝみ
吾つめは　御弓のゆはす
吾けらは　御筆のはやし
吾皮は　御箱の皮に
吾完は　御なますはやし
吾きもも　御なますはやし
吾みきは　御塩のはやし
老はてぬ　吾身ひとつに

11ウ

12ウ

七重花さく　八重はなさくと
まうさね〳〵

右歌一首為鹿述痛作之也

三八六
をしてるや　難波の小江に
いほつくり　かたまりておる
あしかにを　おほきみめすと
なにせむに　わをめすらめや
あきらけく　わかしる事を
歌人と　わをめすらとや
笛ふきと　わをめすらとや
琴ひきと　わをめすらめや

13オ

かれもうけんと　けふ〳〵と
あすかにいたり　たてれとも
置なにいたり　うたねとも
つくぬにいたり　東中の門より
まいりきて　命受れは
馬にこそ　ふもたしかくも
牛にこそ　鼻縄はくれ
あしひきの　此かた山の
もむにれを　五百枝はきたれ
あまてるや　日の異にほして
さひつるや　辛雄にいたし

13ウ

庭立を　雄子に春
をしてるや　難江の小江の
はつたれを　からくたれきて
陶一人の　つくれる庭を
今日ゆきて　明日とりもちて
吾目らに　塩ぬりたへと
時賞毛〳〵

右歌一首為蟹述痛作之也

第十七

讃三香原新都謌一首并短歌

三九〇七
山しろの　くにのみやこは
春されは　花さきをゝり
秋されは　もみち葉にほひ
をはせる泉河乃　かみつ瀬に
宇治橋わたし　よと瀬にはうき
橋わたしありかよふつかへまつらん
万代までに

反歌

三九〇八
楯並いとみの河の水緒たえす
つかへまつらんおほみや所

右天平十三年二月右馬寮頭境部宿祢
老麿作也

14オ

14ウ

哀傷長逝之弟歌一首并短歌

三九五七

あまさかる　ひなをさめにと
大王(オホキミ)の　まけのまに〳〵
出てこし　われをゝくると
あをによし　なら山すきて
泉河　きよきかはらに
馬とゝめ　わかれし時に
よしゆき(好去)て　あれかへりこむ
たいらけく　いはひてまてと
かたらひて　こしひのきはみ
たまほこの　道をたとほみ

15オ

山河の　へなりてあれは
こひしけく　けなかきものを(氣)
見まくほり　おもふあひたに
たまつさの　使(ツ)のくれは
うれしみと　あかまちとふに
をよつれの　たはことゝかも
はしきよし　な弟(オト)のみこと
なにしかも　時しはあらんを
はたすゝき　穂に出る秋の
芽子(ハギ)花　にほへるやとを

言斯人為性好愛花草花樹而多殖於寢(消・殿)院之庭故謂之薫庭也

15ウ

七二

あさにはに　いてたちならし
夕庭に　ふみたひらけす
さほのうちの　里をゆきすき
あしひきの　山のこぬれに
白雲に　たちたなひくと
あれにつけつる佐保山火葬故謂之佐保乃宇治乃さとを行すき

反歌

三九五八

まさきくといひてし物を白雲に
たちたなひくときけはかなしも

三九五九

かゝらんとかねてしりせはこしの海の
ありそのなみも見せまし物を

右天平十八年九月廿五日越中守大伴宿祢家持遙聞弟喪感傷作之也

16オ

忽沈狂疾殆臨泉路仍作歌詞

以申悲緒一首并短歌

三九六〇

大王(オホキミ)の　まけのまに〳〵
大夫(ますらを)の　情(コヽロ)ふりおこし
あしひきの　山坂こえて
あまさかる　ひなにくたりき
いきたにも　いまたやすめす
年月も　いくらもあらぬに
うつせみの　代の人なれは
うちなひき　とこにこひふし
いたけくの　日にけにませは

16ウ

たらちねの　は丶のみことの
大舩の　ゆくら〳〵に
したこひに　いつかもこんと
またすらん　こ丶ろさふしく□□
はしきよし　つまのみことも
あけくれは　門によりたち
衣手を　をりかへしつ丶
夕されは　とこうちはらひ
ぬはたまの　黒髪しきて
いつしかと　なけかすらんと
いも丶しも　わかき子ともは

」17オ

三九六四

山河乃そきへをとほみはしきよし
いもをあひみぬかくやなけかん

右天平十九年春二月廿日越中

國守之舘臥病悲傷聊作此歌

更贈歌一首并短歌

含弘之德垂二息蓬蠖一不レ貲之思
報慰二陋心一載荷二末春一無レ堪レ所
レ喻也但以稚一時不レ涉二遊一藝之庭
横一翰之藻自乏二乎彫蟲一焉幼年
未レ經山柿之門一裁歌之趣詞失二乎
叢一林一矣爰辱二以レ藤續レ錦之言一

」18オ

をちこちに　さはきなくらん
たまほこの　道をたとほ(消・に)
まつかひも　よるよしもなし
おもほしき　ことつてやらす
こふるにし　情はもえぬ
たまきはる　いのちをしけと
せんすへの　たときをしらに
かくしてや　あらしをすらに
なけきふせらん

世間はかすなき物か春花の
ちりのまかひにしぬへき思へは

」17ウ

三九六九

更題二将レ石間レ瓊之詠一因レ是俗愚
懐レ癖不レ能二黙一已一仍捧二数行一式酬
嗤一咲一其詞曰

おほきみの　まけのまに〳〵
しな(消・かせ)る　こしをおさめに
いて丶こし　ますらわれすら
よのなかの　つねしなけれは
うちなひき　とこにこひふし
いたけくの　日にけにませは
かなしけく　こ丶におもひいて
いらなけく　そこにおもひいて

」18ウ

なけくそら　やすけなくに
おもふそら　くるしきものを
あしひきの　やまきへなりて
たまほこの　みちのとほけは
まつかひも　やるよしもなみ
おもほしき　こともかよはす
たまきはる　いのちをしけと
せんすへの　たときをしらに
こもりゐて　おもひなけかひ
なくさむる　こゝろはなしに
春花の　さけるさかりに

」19オ

おもふとち　たをりかさゝす□□
はるの野の　しけみとひくゝ□□
鶯の　音たにきかす
をとめらか　わか菜つますと
くれなゐの　赤裳のすその
はるさめに　にほひひつちて
かよふらん　時のさかりを
いたつらに　すくしやりつれ
しのはせる　君か心を
うるはしみ　此夜すからに
いもねすに　けふもしめらに

」19ウ

こひつゝそをる
反歌
あしひき山さくら花一めたに
きみとしみてはあれ恋めやも

三九七〇

やまふきのしけみとひくゝ鶯の
聲を聞らんきみはともしも

三九七一

いてたゝんちからをなみとこもりゐて
君にこふるにこゝろともなし

三九七二

三月三日大伴宿祢家持
七言晩春三日遊覧一首并序
上巳召辰暮春麗景桃花照瞼以分
紅柳色含苔而競緑于時也携手曠

」20オ

望江河之畔訪酒迥遏野客之家
既而也琴樽得性蘭（消・翠）契和光嗟乎
今旦所恨徳星已少若不扣寂含章
趣
何以攄逍遥之忽諜短筆聊勒四
韵云尓
餘春媚日宜憐賞上巳風光足覧遊
柳陌臨江縟袨服桃源通海泛仙舟
雲罍酌桂三清湛羽爵催人九曲流
縱酔陶心忘彼我酩酊無處不淹留

三月四日大伴宿祢池主
昨日述短懐今朝汗耳目更承賜書

」20ウ

旦奉不次死罪〻〻

不レ遺下賤一頻恵二徳一音一英一雲星一氣逸一
調過レ人智一水仁一山既韞琳瑯之光一彩一潘江
陸海自坐詩書之廊廟一聘二思非常一託二情
有一理一七歩成レ章数一篇満レ紙巧遺二愁一人
之重一患一能除二戀者之積一思一山柿歌泉
比レ此如レ蔑□彫二龍筆一海一粲一然得レ看矣
方知僕之有レ幸也敬和レ歌其詞曰

おほきみの　みことかしこみ
あしひきの　やま野さはらす
あまさかる　ひなもをさむる

無レ不レ酬聊裁拙一詠敬擬解咲一焉
如今賦言勒韵同斯雅作之篇一豈殊将不間瓊一
唱レ声極走曲一欸抑小兒一譬濫一謡敬寫二葉端一式
擬二乱
徒歌也
曰一

七言一首

抄春餘日媚一景麗初一巳和一風拂自一輕
來燕銜レ泥賀レ宇入帰一鴻引レ苔迥赴レ瀛
聞君粛侶新流レ曲禊一飲催レ爵泛レ河清
雖レ欲三迫尋二良此一宴一還知染一懊脚跨一町スルコトヲ

述戀緒歌一首并短歌

いもゝわれも　こゝろはおやし

七八

ますらをや　なにかものもふ
あをによし　ならちきかよふ
たまつさの　つかひたえめや
こもりこひ　いきつきわたり
したもひよ　なけかふわかせ
いにしへゆ　いひつきくらし
よのなかは　かすなきものそ
なくさむる　こともあらむと
さとひとの　あれにつくらく
やまひには　さくらはなちり
かほとりの　まなくしはなく

たくへしと　いやなつかしく
あひみれは　とこはつはなに
情くし　めくしもなしに
はしけやし　あかおくつま
おほきみの　みことかしこみ
あしひきの　やまこえ野ゆき
あまさかる　ひなおさめにと
わかれこし　その日のきはみ
荒璞の　としゆきかへり
春花乃　うつろふまてに
あひみねは　いともすへなみ

しきたへの　袖かへしつゝ
ぬる夜おちす　いめにはみれと
うつゝに(消・は)たゝにあらねは
こひしけく　ちへにつもりぬ
ちかくあらは　かへりにたにも
うちゆきて　いもかたまくら
さしかへて　ねてもこましを
たまほこの　路はしとほく
関さへに　へなりてあれこそ
よし○やし　よしはあらんそ
霍公鳥　きなかんつきに
」23オ

三九七九
あら玉の年かへるまてあひみねは
」23オ

八〇
いつしかも　はやくなりなん
宇の花の　にほへる山を
よそのみも　ふりさけみつゝ
淡海路に　いゆきのりたち
あをによし　ならの吾家に
ぬゑ鳥の　うらなきしつゝ
した恋に　おもひうらふれ
か(消・に)にたち　ゆふけとひつゝ
我をまつと　なすらんいもを
あひてはやみん

三九八〇
心もしのにおもほゆるかも
ぬは玉のいめにはもとなあひみれと
たゝにあらねはこひやますけり

三九八一
あし曳のやま(消・け)伎敞なりてとほけとも
心しゆけはいめにみえけり

三九八二
春花のうつろふまてにあひみねは
月日よみつゝいもまつらんそ
右三月廿日夜裏忽兮起懸情
作大伴宿祢家持

二上山賦一首此山者有射水郡也

三九八五
いみつかは　いゆきめくれる
たまくしけ　ふたかみ山は
」24オ

はる花の　さけるさかりに
あきの葉の　にほへるときに
いてたちて　ふりさけみれは
可牟加良夜　そこはたふとき
やまからや　見かほしからむ
すめかみの　すそまのやまの
しふたにの　佐吉のありそに
ありそに　あさなきに
よするしら浪　ゆふなきに
みちくる塩のいやましに　たゆる事なく
いにしへゆ　いまの乎都豆に
かくしこそ　みる人ことに
」24ウ

かけてしのはむ

三九八六　しふたにのさきのありそによする浪

いやしく〳〵にいにしへおもほゆ

三九八七　たまくしけふたかみ山になく鳥の

聲のこひしきときはきにけり

右三月卅日依興作之家持

遊覧布勢水海賦一首并短歌

此海者有射水郡舊江村也

三九九一　物のふの　やそとものをの

おもふとち　心やらんと

うまなめて　をちこちふりの

」25オ

しらなみの　ありそによする

しふたにの　佐吉（サキ）たもとほり

まつたゑの　なかはまず（過）きて

うなひ河　きよきせことに

うかはたち　かゆきかくゆき

見つれとも　そこもあかにと

ふせのうみに　舟うけすへて

おきへこき　邊にこき見れは

なきさには　あちむらさわき

しまゝには　こぬれはなさき

こゝはくも　見（ミ）のさやけきか

」25ウ

たまくしけ　ふたかみ山に

はふつたの　ゆきはわかれす

ありかよひ　いやとしのはに

おもふとち　かくしあそはむ

いまもみること□□

三九九二　ふせのうみのおきつしら浪ありかよひ

いやとしのはに見つゝしのはん

右守大伴宿祢家持作之四月廿四日

敬和遊覧布勢水海賦一首并一絶

三九九三　ふちなみは　さきてちりにき

うのはなは　いまそさかり（消・と）

あしひきの　山にも野にも

」26オ

ほとゝきす　なきしとよめは

うちなひく　心もしのに

そこをしも　うらこひしみと

おもふとち　うまうちむれて

たつさはり□□　いてたちみれは

いみつ河□□　みなとのすとり□□

あさなきに　かたにあさりし

塩みては　つまよひかはす□□

ともしきに　見つゝすきゆく（き）（さ）

しふたにの　ありそのさきに

おきつなみ　よせくるたまも

」26ウ

かたよりに　かつらにつくり
いもかため　てにまきもちて
うらくはし　布勢のみつうみに
あまふねに　まかちかいぬき
しろたへの　袖ふりかへし
あともひて　わかこきゆけは
をふのさき　花ちりまかひ
なきさには　あしかもさはき
さゝれなみ　たちてもゐても
こきめくり　みれともあかす
あきさらは　もみちのときに
はるさらは　花のさかりに

27オ

すめかみの　うしはきいます
にひかはの　そのたちやまに
とこなつに　ゆきふりしきて
おはせる　かたかひかはの
きよきせに　あさよひことに(朱)
たつきりの　おもひすきめや
ありかよひ　いやとしのはに
よそのみも　ふりさけみつゝ
よろつよの　かたらひくさと
いまたみぬ　人にもつけん
をとのみも　なのみもきゝて

28オ

八四

かもかくも　きみかまにまと
かくしこそ　みもあきらめゝ
たゆる日あらめや

三九九四

しらなみのよせくる玉もよのあひたも
つきて見にこむきよき濱邊を

右丞大伴宿祢池主作四月廿六日追和

立山賦一首并短歌

此立山者新川郡在之也

四〇〇〇

あまさかる　ひなになかゝす
こしのなか　くぬちこと〳〵
やまはしも　しゝにあれとも
かはゝしも　さはにゆけとも

27ウ

ともしふるかね

四〇〇一

たちやまにふりをける雪をとこなつに
見れともあかすかむからな（消・る）し

四〇〇二

かたかひの河の瀬きよくゆく水の
たゆることなくありかよひみん

四月廿七日大伴家持作之

敬和立山賦一首并二絶

四〇〇三

あさひさし　そかひにみゆる
かむなから　みねにおはせる
しらくもの　ちへをおしわけ
あま曽ゝ理　たかきたち山

28ウ

ふゆなつと　わく事もなく
しろたへに　雪はふりをきて
いにしへゆ　ありきにけれは
こゝしかも　いはのかむさひ
たまきはる　いく代經にけん
たちてゐて　みれともあやし
峯たかみ　谷をふかみと
おち瀧つ　きよきかふちに
あさゝらす　霧たちわたり
夕されは　くもゐたなひき
くもゐなす　心もしのに
」29オ

たつ霧の　おもひすくさす
ゆく水の　音もさやけく
万代に　いひつきゆかむ
かはしたえすは

四〇〇四　立山にふりをける雪のとこなつに
けすてわたるはかんなからとそ

四〇〇五　おちたきつかたかひかはのたえぬこと
いまみる人もやますかよはん

右掾大伴宿祢池主和之四月廿八日

入京漸近非情難撥述懷一首并一絶

四〇〇六　かきかそふ　ふたかみ山に
」29ウ

かんさひて　たてるとかの木
もともえも　おやしときはに
はしきよし　わかせのきみを
朝さらす　あひてこと、ひ
夕されは　手たつさはりて
いみつ河　きよきかふちに
出たちて　わかたちみれは
あゆの風　いたくしふけは
みなとには　白浪たかみ
妻よふと　すとりはさわく
あしかると　あまの小舩は
」30オ

入江こく　かちの音たかし
そこをしも　あやにともしく
しのひつゝ　あそふさかりを
すめろきの　をすくになれは
みこともち　たちわかれなは
おくれたる　きみはあれとも
玉桙の　道行われは
白雲の　たなひく山を
いはねふみ　こゑへなりなは
こひしけく　氣のなかけむそ
そこもへは　こゝろしいたし
」30ウ

翻刻　京都女子大学図書館蔵『かなが き萬葉集』(二)

ほとゝきす　こゑにあへぬく
たまにもか　手にまきもちて
あさよひに　みつゝゆかんと
をきていかはおし

四〇〇七　わかせこはたまにもかもな郭公
こゑにあへぬきてにまき(消・てらカ)ゆかん

右大伴宿祢家持贈掾大伴宿祢池主
四月卅日

忽入見京述懐之作一生別悲兮断
レ腸万廻怨緒難レ禁聊奉所心一一首并二絶

四〇〇八　あをによし　ならをきはなれ
あまさかる　ひなにはあれと
わか(消・もカ)せこを　見つゝしをれは
おもひやる　こともありしを
おほきみの　みことかしこみ
をすくにの　ことゝりもちて
わか草の　あゆひたつくり
むら鳥の　あさたちいなは
をくれたる　あれやかなしき
旅に行　君かもこひん
おもふそら　やすくあらねは
なけかくを　とゝめもかねて

31オ

見わたせは　うのはな山に
郭公　ねのみしなかゆ
朝霧の　みたるゝこゝろ
ことにいて、　いはゝゆゝしみ
となみやま　手向の神に
ぬさまつり　あかこひのまく
はしけやし　きみかたゝかを
まさきくも　ありたもとほり
つきたゝは　ときもかはさす□□
なてしこか　花のさかりに
あひみしめとそ

32オ

四〇〇九　たまほこのみちのかみたちまひはせん
わかおもふ君をなつかしみせよ

四〇一〇　うらこひしわかせのきみはなてしこか
花にもかもなあさなさなみん

右大伴池主報贈　五月二日

四〇一一　思放逸鷹夢見感悦作歌一首并短歌
天王乃　とほのみかとそ
み雪落　越と名におへる
あまさかる　ひなにしあれは
山高み　河とほしろし□□
野をみろみ　くささこそしけき

31ウ

32ウ

あゆはしる　なつのさかりと
しまつとり　鵜養(ウカヒ)かともは
ゆくかはの　きよき瀬ことに
か丶りさし　なつさひのほる
露霜の　あきにいたれは
野もさはに　とりすたけりと
ますらをの　ともいさなひて
たかはしも　あまたあれとも
欠形尾の　あか大黒(オホクロ)に　注云大黒者蒼鷹之名也
しらぬりの　鈴とりつけて
朝猶尒　いほつとりたて
」33オ

夕猶尒　ちきりふみたて
おほことに　ゆるすことなく
手放(タハナチ)も　をちもかやすき
これを丶きて　またはありかたし
さならへる　たかはなけんと
心には　おもひほこりて
ゑまひつ丶　わたるあひたに
たふれたる　しこつおきなの
ことたにも　われにはつけす
とのくもり　あめのふる日を
とかりすと　名のみをのりて
」33ウ

三嶋野を　そかひに見つ丶
二上の　山とひこえて
くもかくり　かけりいにきと
かへりきて　しはふれつくれ
をくよしの　そこになけれは
いふすへの　たときをしらに
心には　ひさへもえつ丶
おもひこひ　いきつきあまり
けたしくも　あふことありやと
あしひきの　をてもこのもに
となみはり　もりへをそゑて
」34オ

ちはやふる　神のやしろに
てる鏡　しつみとりそへ
こひのみて　あかまつときに
をとめらか　いめにつくらく
なかこふる　そのほつたか（消・を）(は)
まつたゑの　はまゆきくらし
つ尒(ナ)しとる　ひみのゑすきて
たこのしま　とひたもとほり
あしかもの　すたくふる江に
をとつ日も　きのふもありつ
ちかくあらは　いまふつかなめ
」34ウ

とをくあらは　なぬかのうちは
すきめやも　きなんわかせこ
ねもころに　なこひそよとそ
いまにつけつる

四〇一二　矢形尾の鷹を手にすゑみしま野に
からぬ日まねく月そへにける

四〇一三　二上のをちもこのもにあみさして
あかまつたかをいめ見つけつも

四〇一四　まつかへりしひにてあれかもさやまたの
をちかその日にもとめあはすけん

四〇一五　心にはゆるふことなくすかのやま
」35オ

（消・獨）

第十八

獨居幄裏遙聞霍公鳥喧作歌并短歌

四〇八九　高御座　あまの日つきと
すめろきの　かみのみことの
きこしをす　くにのまほらに
山をしも　さはにおほみと
百鳥の　来居てなく聲
春されは　きゝのかなしも
いつれをか　わきてしのはん
宇の花の　さく月たては
」36オ

すかなくのみやこひわたりなん
右射一水郡古一江村取二獲蒼鷹一形一容
美一麗鷙一雄秀レ群也於レ時養吏
山一田史君麿調一試失レ節野一獦乖レ候
搏レ風之翅高一翔匿レ雲腐一鼠之
餌呼一留靡レ驗於是張設羅一網一窺
乎非常一奉二弊神祇一恃乎不レ虞也奥
以夢裏有娘一子一喻曰使一君勿下作二苦一念一
空費精神放一逸彼鷹獲得未幾
矣哉須一臾覚一窘有レ悅二於レ懐一因作却
レ恨之歌式旌二感一信一　守大伴家持○九月廿六日作
九月廿六日作也
」35ウ

めつらしく　なくほとゝきす
あやめくさ　珠ぬくまてに
ひるくらし　よわたしきけと
きくことに　こゝろつこきて
うちなけ（消・く）あはれのとりと
いはぬときなし

反歌

四〇九〇　ゆくへなくありわたるとも郭公
なきしわたらはかくやしのはん

四〇九一　宇の花のさくにしなけはほとゝきす
いまめつらしも名のりなくなへ
」36ウ

四〇九二

ほと、きすいとねたけくは橘の
はなちるときにきなきとよむる

右四首十日家持作之

賀陸奥國出金　詔書謌一首并短歌

四〇九四

あしはらの　みつほの國を
あまくたり　しらしめしける
すめろきの　神のみことの
御代かさね　天の日嗣と
しらしくる　きみの御代〳〵
しきませる　四方の國には
山□河を　ひろみあさみと

37オ

たてまつる　御調寶は
かそへえす　つくしもかねつ
しかれとも　吾大王乃
もろ人を　いさなひたまひ
善事を　はしめたまひて
くかねかも　たのしけくあらんと
おもほして　したなやますに
鶏鳴　東國乃
みちのくの　小田ある山に
金ありと　まうしたまへれ
御心を　あきらめたまひ

37ウ

天地の　神あひうつなひ
皇御祖の　御霊たすけて
遠代に　かゝりしことを
朕御世に　あらはしてあれは
御食國は　さかへん物と
かむなから　おもほしめして
もの、ふの　八十伴の雄を
まつろへの　むけのまに〳〵
老人も　女童兒も
しかねかひ　心たらひに
撫賜ひ　治め賜（消・はゝへ）

38オ

こゝをしも　あやにたふとみ
うれしけく　いよ、おもひて
大伴の　遠つ神祖の
其名をは　大来目主と
おひもちて　つかへしつかさ
海行は　**みつ**く、屍
山ゆかは　草むす屍
大皇の　へにこそしなめ
かへりみは　せしとことたて
大夫乃　きよきその名を
いにしへよ　いまのをつゝに

38ウ

なかさへる　おやのこともそ
大伴と　佐伯の氏は
人の祖(オヤ)の　たつる辞(コト)たて
人の子は　祖(オヤ)の名不(タヽ)レ絶(ス)
大君に　まつろふ物と
いひつける　ことのつかさそ
梓弓　手にとりもちて
剱大刀　こしにとりはき
あさまもり　ゆふのまもりよ
大王の　み門のまもり
われをゝきて　また人はあらし

」39オ

九六

といやたて　おもひしまさる
大皇の　御言(ミコト)のさきの(をイ)
きけはたふ(貴)とみ　一云たふとく しあれは

反歌三首

四〇九五　大夫(マスラヲ)の心おもほゆおほきみの
みことのさきをきけはたふとみ

四〇九六　大伴のとをつかむおやのおくつきは
しるくしめたて人のしるへく

四〇九七　すめろきの御世さかへんとあつまなる
みちのく山にこかね花さく

天平感宝元年五月十二日於越中

」39ウ

國守舘大伴宿祢家持作之

為幸行芳野離宮之時儲作歌

一首并短歌

四〇九八　たかみくら　あまの日嗣と
天下　しらしめしける
すめろきの　かみのみことの
かしこくも　はしめたまひて
たふとくも　さためたまへる
みよしのゝ　このおほみやに
ありかよひ　めしたまふらし
もの、ふの　やそとものおも

」40オ

四〇九九　おのかおへる　おのか名に〳〵
大王(オホキミ)の　まけ(麻氣)のまく(麻久)〳〵
此河の　たゆることなく
此山の　いやつき〳〵に
かくしこそ　つかへまつらめ
いやとほなかに

反歌

四一〇〇　いにしへをおもほすらしもわかおほきみ
よしのゝみやをありかよひめす
物のふのやそ氏人もよしの川
たゆることなくつかへつゝみん

」40ウ

為贈京家願真珠歌一首并短歌

四〇一　珠洲のあまの　おきつみかみに
いわたりて　かつきとるといふ
あはひたま　いほちもかも
はしきよし　つまのみことの
ころもての　わかれしときゆ
ぬは玉の　夜床かたこり
あさねかみ　かきもけつらす
いて丶こし　月日よみつ丶
なけくらん　心なくさよ
ほと丶きす　きなく五月の
」41オ

あやめくさ　花たちはなに
ぬきましへ　かつらにせ(消・む)と
つ丶みてやらん

四〇二　白玉をつ丶みてやらはあやめ草
はなたちはなにあへもぬくかね

四〇三　おきつしまいゆきわたりてかつくちふ
あはひたまもかつ丶みてやらん

四〇四　わきもこか心なくさにやらんため
おきつしまなるしらた(消・め)もかも

四〇五　しら玉のいほつ丶とひを手にむすひ
おこせんあまはむかしくもあるか
」41ウ

右五月十四日大伴宿祢家持依興作

教喩史生尾張少昨歌一首并短歌

七出例云

但犯二一條一即合レ出レ之無二七出一輙弃者
徒一年半三不去云

雖レ犯二七出一不レ合レ弃レ之　違者杖一百
唯犯二姧悪疾一得レ弃レ之

兩妻例云

有レ妻更娶者徒一年女家杖一
百離レ之

詔書云　愍賜　義夫節婦
謹案二先件数條一建レ法之基化レ道之源也
」42オ

然則義夫之道情存レ無レ別一家同一財
豈有二忘レ舊愛レ新之志一哉所一以綴二作
數行之歌一令レ悔二弃レ旧之惑一其詞曰

四〇六　おほなんち　すくなひこなの
神代より　いひつきけらし
父母を　見れはたうとく
妻子みれは　かなしくめくし
うつせみの　よのことはりし
かくさまに　いひける物を
世の人の　たつることたて
ちさの花　さけるさかりに
」42ウ

はしきよし　そのつまのこら
あさよひに　ゑみみえますも
うちなけき　かたりけまくは
とこしへに　かくしもあらめや
天地の　かみことよせて
春花の　さかりもあらたしけん
ときのさかりそ
波居て　なけかすいもか
いつしかも　つかひのこんと
またすらん　心さふしく
南吹　雪消益て

」43オ

四一〇九

さとはすきみかみやてしりふり
紅はうつろふ物そつるはみの
なれにしきぬになをしかぬかも

右五月十五日家持作之

先妻不待夫君之喚使自来

時作歌一首

四一〇

さふる兒かいつきしとのにすゝかけぬ
はゆまくたれりさともとゝろに

同月十七日　家持作

橘謌一首并短歌

四一一

かけまくも　あやにかしこし
射水河　流水沫の
よるへなみ　さふる其兒に
ひもの緒の　いつかりあひて
にほとりの　ふたり雙坐
なこのうみの　おきをふかめて
さとはせる　きみかこゝろの
すへもすへなさ言二佐夫流者遊行女婦之字一也

反歌三首

四一〇七

あをによしならにあるいもかかた〳〵に
まつらん心しかにはあらしか

四一〇八

里人のみる目はつかしさふる兒に

」43ウ

さとはすきみかみやてしりふり
紅はうつろふ物そつるはみの
なれにしきぬになをしかぬかも

右五月十五日家持作之

先妻不待夫君之喚使自来

時作歌一首

四一〇

さふる兒かいつきしとのにすゝかけぬ
はゆまくたれりさともとゝろに

同月十七日　家持作

橘謌一首并短歌

四一一

かけまくも　あやにかしこし
すめろきの　かみのおほみよに
たちまもり　常世にわたり
夜ほこもち　まゐてこしとき
時しくの　香久の菓を
かしこくも　のこしたまへれ
國もせに　おひたちさかへ
はるされは　孫枝もいつゝ
ほとゝきす　なく五月には
はつはなを　えたにたおりて
をとめらに　つとにもやりみ
しろたへの　そてにもこきれ

」44オ

」44ウ

かくはしみ　おきてからしみ
あゆる實(ミ)は　たまにぬきつゝ
手にまきて　みれともあかす
秋つけは　しくれの雨ふり
あしひきの　やまのこぬれは
くれなゐに　にほひちれしも(止)(トモ)
たちはなの　なれるその実は
ひたてりに　いや見かほしく
みゆきふる　冬にいたれは
霜をけとも　其葉もかれす
常磐なす　いやさかはえに
」45オ

しかれこそ　神の御代より
よろしなへ　此橘を
ときしくの　かくの木實(コノ)と
名つけけらしも

反歌一首

四一三　橘の花にも實にもみつれとも
いやときしくになほし見かほし

閏五月廿三日家持作

庭中花作歌一首并短歌

四一三　おほきみの　とほのみかとと
まきたまふ　官(ツカサ)のまにま
」45ウ

みゆきふる　こしにくたりき
あらたまの　としの五年(イツトセ)
しきたへの　手枕まかす
ひもとかす　まろねをすれは
いふせみと　情(コヽロ)なくさに
なてしこを　やとにまきおほし
夏の丶の　さゆりひきうへて
さく花を　いて見ることに
なてしこか　そのはなつまに
さゆり花　ゆりもあはんと
なくさむる　心のなくは
あまさかる　ひなに一日も
」46オ

あるへくもあれや

反歌二首

四一四　なてしこか花みることにをとめらか
ゑまひのにほひおもほゆるかも
四一五　さゆり花ゆりもあはんとしたはふる
心しなくは今日もへめやも

同閏五月廿六日家持

國掾久米朝臣廣縄以天平廿年
附朝集使入京其事畢而天平感宝
元年閏五月廿七日還到本任仍長官
之舘設詩酒宴樂飲於時主人守大
伴宿祢家持作歌一首并短歌
」46ウ

四二六　おほきみの　まきのまに〳〵
とりもちて　つかふるくにの
年の内の　ことかたねもち
たまほこの　道にいてたち
いはねふみ　山こえ野ゆき
みやこへに　まゐしわかせを
あらたまの　としゆきかへり
月かさね　みぬ日さまねみ
こふるそら　やすくしあらねは
ほとゝきす　きなく五月の
あやめ草　よもきかつらき

」47オ

さかみつき　あそひなくれと
射水河　雲消みちて
ゆく水の　いやましにのみ
たつかなく　なこ江のすけの
ねもころに　おもひむすほれ
なけきつゝ　あかまつ君か
ことをはり　かへりまかりて
夏の野の　さゆりのはなの
花咲に　に布夫にゑみて
あはしたる　今日をはしめて
鏡なす　かくしつねみむ
おもかはりせす

」47ウ

四二七　反歌二首
こその秋あひみしまにまけふみれは
おもやめつらしみやこかた人

四二八　かくしてもあひみるものをすくなくも
年月へれは恋しけれやも

天平感寶元年閏五月六日以來
起小旱百姓田畝稍有彫色至
六月朔日忽見雨雲之氣仍作
雲歌一首短歌一絶

四二三　すめろきの　しきます國の
あめのした　四方のみちには

」48オ

うまのつめ　いつくすきはみ
ふなのへの　いはつるまてに
いにしへよ　いまのたつみに
万調　まつるつかさと
つくりたる　そのなりはひを
あめふらす　日のかさなれは
うへし田も　まきしはたけも
あさことに　しほみかれゆく
そをみれは　心をいたみ
みとりこの　ちこふかことく
あまつみつ　あふきてそまつ

」48ウ

あしひきの　山のたおりに　やすの河　なかにへたてゝ
このみゆる　あまのしら雲　むかひたち　そてふりかはし
わたつみの　おきつみやへに　いきのをに　なけかすこら
たちわたり　とのくもりあひて　わたしもり　ふねもまうけす
あめもたまはめ　はしたにも　わたしてあらは
反歌一首　そのへゆも　いゆきわたらし
四二三　このみゆるくもほひこりてとのくもり　たつさはり　うなかけりゐて
雨もふらぬかこゝろたらひに　おもほしき　こともかたらひ
右六月一日晩頭守大伴家持作之　なくさむる　心はあらむ
七夕歌一首并短歌　なにしかも　あきにしあらねは
四二五　あまてらす　かみのみよゝり　ことゝひの　ともしきこら
49オ　49ウ

うつせみの　代人のわれも
こゝうしも　あやにくすしみ
ゆ性きか更へる　年のはことに
あまのはら　ふりさけみつゝ
いひつきにすれ
反歌二首
四二六　あまの河はしわたせらはそのへゆも
いわたらさむを秋にあらすとも
四二七　やすの河こむかひたちてとしのこひ
けなかきこらかつまとひのよそ
右七月七日仰見天漢　家持作之
50オ

第十九
天平勝寶二年三月八日詠白
太鷹歌一首
四二五四　あしひきの　山坂超て
去更ユキカヘル　年の緒なかく
科坂在シナサカル　こしにしすめは
大王の　敷座國シキマス
京師ミヤコをも　此間ココもおやしと
心には　おもふものから
語さけコトハ　見さくる人眼メ
50ウ

乏と　おもひししけし
そこゆへに　情なくやと
秋附は　芽子さきにほふ
石瀬野に　馬たきゆきて
をちこちに　鳥ふみたてゝ
白塗の　小鈴もゆらに
あはせやり　ふりさけみつゝ
いきとほる　心のうちを
思ひ延　うれしみなから
枕附　つまやのうちに
鳥座ゆひ　すへてそわか飼
」51オ

四二五五
真白部のたか
矢形尾のましろの鷹をやとにすへ
かきなて見つゝ飼くしよしも

四二五六
潜鷸歌一首并短歌
荒玉の　年往更
春されは　花のみにほふ
あしひきの　山したひゝき
おちたきつ　流孥田乃
河の瀬に　年魚兒狭走
(消・瀬)嶋津鳥　鷸養ともなへ
かゝりさし　なつさひゆけは
」51ウ

わきも子か　かたみかてら(消・に)
紅の　八塩にそめて
をこせたる　服の襴も
とをりてぬれぬ

四二五七
紅の衣にほはし孥田河
たゆる事なくわれかへりみん

四二五八
毎年に鮎し走れはさきた川
鷸八頭かつけて河瀬たつねん

悲世間無常歌一首并短歌

四二六〇
天地の　遠きはしめよ
俗中は　常なきものと
」52オ

語續　なからへきたれ
天原　ふりさけ見れは
照月も　みちかけしけり
あしひきの　山の木末も
春去は　花さきにほひ
秋つけは　露霜負て
風交　もみちちりけり
うつせみも　かくのみならし
紅の　いろもうつろひ
ぬはたまの　黒髪かはり
朝の咲　暮かはらひ
」52ウ

吹風の　見えぬかことく
逝水の　とまらぬことく
常もなく　うつろふみれは
にはたつみ　なかるゝなみた
とゝめかねつも

四六一　言とはぬ木すら春さき秋つけは
もみちちらくは常をなみこそ

四六二　うつせみの常なきみれは世間に
情つきすておもふ日そおほき

慕振勇士之名歌一首并短歌

四六四　ちゝのみの　父のみこと

はゝそ葉の　母のみこと
おほろかに　情盡して
おもふらん　其子なれやも
大夫や　むなしくあるへき
梓弓　すゑふりおこし
投矢もち　千尋射わたし
劔刀　こしにとりはき
あしひきの　八峯ふみこえ
さしまくる　情不障
後の代の　かたりつくへく
名をたつへしも

四六五　大夫は名をしたつへし後の代に
聞継人もかたりつくかね

右二首追和山上憶良臣作歌

詠霍公鳥并時花歌一首并短歌

四六六　時ことに　いやめつらしく
八千種に　草木花さき
なく鳥の　音も更布
耳にきゝ　眼にみることに
うちなけき　しなへうらふれ
しのひつゝ　あらそふはしに
このくれの　四月したては

よこもりに　なく霍公鳥
むかしより　かたりつきつる
鶯の　うつし真子かも
菖蒲　花橘を
嫩嬬らか　珠ぬくまてに
あかねさす　晝はしめらに
あしひきの　八岳飛越
夜干玉の　夜るはすからに
暁の　月に向て
往還り　なきとよむれと
いかゝあきたらん

四一六七　反歌

毎レ時いやめつらしく咲花を
折も不レ折見らくしよしも

四一六八

毎年に来なく物ゆへ霍公鳥
きけはしのはくあはぬ日おほみ

注云毎年謂二之等之乃波一

右廿日雖未及時依興豫作也

為家婦贈在京尊母所誂作歌

一首并短歌

四一六九

霍公鳥　来なく五月に
咲にほふ　花橘の
香を吉　おやの御言の
朝暮に　きかぬひまなく

四一七〇

あまさかる　ひなにしおれは
あしひきの　山のたをりに
立雲を　よそのみみつゝ
なけくそら　やすけくなくに
おもふそら　くるしき物を
なこの海部の　潜取云
真珠の　見かほし御面
たゝ向　見ん時までは
松柏の　さかへいまさね

尊あかきみ　注云御面謂二之美於毛和一

反歌

白玉のみかほし君を見す久に

夷にしをれはいけりともなし

四月三日贈越前判官大伴宿祢池主

霍公鳥歌不勝感旧之意述懐一首并短歌

四一七七

わかせこと　手携て
暁来は　出たちむかひ
暮去は　ふりさけ見つゝ
おもへかも　見なきし山に
八峯には　霞たなひき
谷へには　海石榴花さき
うら悲し　春しすくれは
霍公鳥　いやしきなきぬ

四一七八

獨のみ　きけは不怜も
君とわれ　へたてゝ恋ふる
利波山　飛超去て
明立は　松の狭枝に
暮去は　月にむかひて
あやめくさ　玉貫までに
鳴とよめ　安寐不レ令レ宿
君をなやませ

四一七九

吾耳きけは不レ怜霍公鳥
丹生の山邊に伊去鳴にも
霍公鳥夜なきをしつゝ我せこを

安宿勿令寐(ヤスイシナスナ)ゆめ心あれ

不飽感霍公鳥之情述懐作歌

一首并短歌

四一八〇　春過て　夏来むかへは
あしひきの　山よひとよめ
さ夜中に　なく霍公鳥
はつ聲を　きけはなつかし
あやめくさ　花橘を
ぬきましへ　かつらくまてに
里とよみ　なきわたれとも
尚(ナヲ)ししのはん

」57オ

四一八一　反歌三首
さ夜ふけて暁月に影みゆる(えて)
なく霍公鳥きけはなつかし

四一八二　霍公鳥きけともあかす網とりに
とりてなつけなかれす鳴金(カネ)

四一八三　霍公鳥飼(カヒ)とほせらは今年經て
いまこん夏はまつなきなんを

詠山振花歌一首　并短歌

四一八五　うつせみは　戀をしけみと
春まけて　念ひしけれは
引攀て　折も折らすも
見ることに　情(コヽロ)なきむと

」57ウ

しけ山の　谿へにおふる
山振を　やとに引うへて
朝露に　にほへる花を
見ることに　念ひはやまて
恋ししけしも

四一八六　山吹をやとにうへてはみることに
思はやます恋こそまされ

六日遊二覧布勢水海一作歌一首并短歌

四一八七　おもふとち　ますらおのこの(大夫)
このくれに　しけきおもひを
見あきらめ　心やらんと

」58オ

布勢の海に　小舟つらなめ
まかいかけ　いこきめくれは
をふの浦に　霞たなひき
たる姫に　藤浪さきて
濱きよく　白波さわき
及(シク)〳〵に　恋はまされと
今日のみに　あきたらめやも
かくしこそ　弥年のはに
春花の　しけきさかりに
秋の葉の　もみつる時に
ありかよひ　見つゝしのはめ

」58ウ

四一八八　此布施の海を　藤浪の花のさかりにかくしこそ　浦こきへつゝ年にしのはめ

贈水（消・□）烏越前判官大伴宿祢

池主歌一首并短歌

四一八九　天さる　ひなとしあれは　そここゝも　おなしこころそ　家さかり　としのへゆけは　うつせみは　物おもひしけし　そこゆへに　心なくさに　ほとゝきす（霍公鳥）　なくはつ聲を

59オ

橘の　珠にあへぬく　かつらきて　遊るれはしも　ますらおを　ともなへたてゝ　叔羅河　なつさひのほり　平瀬には　さてさしわたし　早き瀬に　烏をしつめつゝ　月に日に　しかもあそはね　はしきわかせこ

四一九〇　叔羅河湍を尋つゝわかせこは　うかはたゝさね情なくさに

四一九一　鸕河立とらさむあゆのしかはたは

59ウ

一一六

われにかきむけおもひし念は

右九日附使贈之

詠霍公鳥并藤花歌一首并短歌

四一九二　桃花　紅色に　にほひたる　面輪のうちに　青柳の　ほそき眉根を　咲まかり　朝影みつゝ　をとめらか　手にとりもたる　真鏡　蓋上山に　このくれの　しけき谿邊を　めすらめに　旦飛わたり

60オ

四一九三　暮月夜　かそけき野へに　藤浪の　花なつかしみ　ひきよちて　袖にこきれつ　染は染とも

霍公鳥鳴羽ふれに（消・し）ちりにけり

盛過らし藤浪の花

一云ちりぬへみ袖にこきいれつ藤浪の花

同九日作之

廿二日贈判官久米朝臣廣縄

霍公鳥歌怨恨歌一首并短歌

四二〇七　此間にして　そかひにみゆる　わかせこか　垣つの谿に

60ウ

一一七

あけされは　榛狭枝に
ゆふされは　藤のしけみに
遙〳〵に　鳴霍公鳥
我やとの　殖木橘
花にちる　時をまたしみ
きなかなく　そこはうらみす
しかれとも　谷かたつきて
家居せる　君か聞つゝ
つけなくもうし
反歌
四二〇八　我幾許までと来なかす霍公鳥
ひとり聞つゝ告ぬ君かも
」61オ

四二〇九　詠霍公鳥歌一首　并短歌
たにちかく　いへはおれとも
こたかくて　さとはあれとも
ほとゝきす　いまたきなかす
なくこゑを　きかまくほりと
あしたには　かとにいてたち
ゆふへには　たにを見わたし
こふれとも　ひとこゑたにも
いまたきこえす
四二一〇　ふちなみのしけりはすきぬあしひきの
山ほとゝきすなとかきなかぬ
」61ウ

四二一一　追同處女墓歌一首　并短歌
古に　ありけるわさの
くすはしき　事といひ継
ちぬおとこ　うなひ壯子の
うつせみの　名をあらそふと
玉剋　壽もすてゝ
あらそふに　つま問しける
をとめらか　きけはかなしさ
春花の　にほへ盛て
秋の葉の　にほひに照れる
おしき身の　さかりなる尚
大夫の　語いたはしみ
」62オ

父母に　啓別れて
家さかり　海邊に出立
朝暮に　みちくる潮の
八隔浪に　なひく珠藻の
節問も　惜き命を
露霜の　過ましにける
奥墓を　こゝにさためて
後ノ代の　聞継人も
いや遠に　しぬひにせよと
黄楊小櫛　しかさしけらし
おひてなひけり
」62ウ

四三三
をとめらか後の表と黄楊小櫛
生かはり生てなひきけらしも

右五月六日依興家持作之

挽歌一首并短歌

四三四
天地の　初の時従
宇津曽みの　八十伴の男は
大王に　まつろふ物と
定めたる　官にしあれは
天皇の　命かしこみ
夷放　國を治むと
あしひきの　山河へたて
風雲に　言かよへと
たゝにあはぬ　日のかさ(消・れる)
思ひ恋ひ　氣衝居るに
玉杵の　道来人の
傳言に　吾に語らくは
はしきよし　君は比来
うらさひて　嘆をいます
世間の　うけくつらけく
さく花も　時にうつろふ
うつせみの　無常ありけり
たらちねの　御母之命

」63ウ

なにしかも　時しはあらんを
まそ鏡　見れともあか(消・ぬ)
玉の緒の　惜きさかりに
立霧の　うせゆくことく
をく露の　消ゆくかこと
玉藻なす　なひきこいふし
ゆく水の　とゝめもえすと
狂言や　人のいひつる
逆言を　人の告つる
梓弧　爪よる音の
遠音にも　きけはかなしみ

」64オ

庭たつみ　流るゝなみた
とゝみかねつも

反歌

四三五
遠音も君かなけくと聞つれは
ねにのみなかる相思われは

四三六
世間の常なき事はしるらんを
情つくすな大夫おにして

右家持弔聟南右大臣家藤原二郎
之喪母患也五月廿七日

従京師来贈歌一首并短歌

四三〇
わたつうみの　かみのみことの
みくしけに　たくはひをきて
いつくとふ　たまにまさりて

」64ウ

おもへりし　あかこにはあれと
うつせみの　よのことはりと
ますらおの　ひきのまに〳〵
しなさかる　こしちをさして
はふつたの　わかれにしより
おきつなみ　とをむまよひき
おほふねの　ゆくら〳〵に
おもかけに　もとなみえつゝ
かくこひは　おいつくあかみ
けたしあへんかも

反歌

かくはかりこひしくしあらはまそかゝみ

四三二

」65オ

みぬひときなくあらまし物を

右二首大伴氏坂上郎女賜女子大嬢也

悲傷死妻歌一首并短歌　作主未詳

四三六

天地の　神はなかれや
愛（ウツクシキ）　吾妻はなる
光神（ヒカル）　鳴（ナル）はたをとめ
携手（タツサヒテ）　ともにあらんと
おもひしに　情（コヽロ）たかひぬ
いはんすへ　せんすへしらに
木綿手次（ツキ）　肩にとりかけ
倭文幣（シツヌサ）を　手にとりもちて
なさけ（離）そと　われは祈れと

」65ウ

一二二

巻て寐し　いもか手本は
雲にたなひく

反歌

○窟（ウツ）には　おもひてしかも夢のみに
手本巻窟（ヌ）とみれはすへなし

右二首傳誦遊行女婦蒲生是也

四三七

天平五年贈入唐使歌并短歌

虚見都　山跡乃國
青丹よし　平城京師ゆ
をしてる　難波にくたり
住吉の　三津に舶（フナ）のり
直渡（タヽワタリ）　日の入國に

」66オ

つかはさる　わかせの君を
かけまくの　ゆゝしかしこき
墨の江の　わか大御神
舶のへに　うしはきいまし
舶（フナ）ともに　御立（ミタチ）いまして
さしよらん　磯の埼（サキ）〳〵
こきはてん　とまり〳〵に
あらき風　浪にあはせす
平らけく　率（イ）てかへりませ
もとのみかとに

四三四

奥つ浪邊（ヘ）波なこしそ君か舶

」66ウ

こきかへりきてつにはつるまて

向京一路上依興預作侍宴應

詔歌一首　并短歌

四三五四

蜻嶋　山跡國を
天雲に　磐舩浮て
ともにへに　真かち繁貫
いこきつゝ　國看しせして
あもりまし　掃ひ平らけ
千代累　いやつき〳〵に
しらしくる　天の日つきと
神なから　吾皇乃

」67オ

秋の花の　我色〳〵に
見えたまひ　あきらめたまひ
酒見附　さかゆるけふの
あやにたうとき

反歌

四三五五

秋一時花種〳〵にあれと色別に
見しあきらむるけふの貴とさ

勅従四位上高麗朝臣福信遣於
難波賜酒肴入唐使藤原朝臣清河
老謙天皇
等一　御歌一首并短歌

四三五四

虚見都　山跡国波
水のうへハ　地一往如久

」68オ

天下　治たまへは
物のふの　八十友の雄を
撫たまひ　とゝのへたまひ
食國の　四方の人をも
あてさはす　めくみたまへは
昔より　なかりし瑞も
たひみねく　申したまひぬ
手拱て　事無き御代と
天地の　日月とともに
万代に　記續そ
八隅知之　吾天皇は

」67ウ

船上波　床にます如
大神の　しつむる國そ
四の舶　舶のへならへ
平らけく　はやわたりきて
かへり事　奏日に
あひ飲酒そ　このとよ御酒は

反歌

四三五五

四の舶はやかへり来白香著
朕裳の裙して、またなん
右發遣　勅使并賜酒樂宴之
日月未得詳審也

為應　詔儲作歌一首并短歌

」68ウ

四三六六

あしひきの　八岑のうへの
とかの木の　いや継〳〵に
松**か**根の　たゆる事なく
青によし　ならの京師に
万代に　國しらしむと
やすみしゝ　わか大皇の
神なから　おもほしめして
豊ノ宴(トヨアカリ)　見せますけふの(は)
ものゝふの　やそとものおの
嶋山に　あかる橘
うすにさし　紐とき放(サケ)て
」69オ

あたまもる　おさへの城(キ)そと
しこしめす　四方の國には
ひとさはに　みちてはあれと
とりかなく　あつまをのこは
いてむかひ　かへりみせすて
いさみたる　たけき軍卒(イクサ)と
ねきたまひ　まけのまに〳〵
たらちねの　はゝかめかれて
若草の　つまをもまかす
あら玉の　月日よみつゝ
あしかちる　難波のみつに
」70オ

千年ほき　ほきゝとよもし
ゑら〳〵に　つかへまつるを
みるかたふとさ

四三六七

反歌
すめろきの御代万代にかくしこそ
見せあきらめゝ立年のはに

此二首**家**持作之

第二十

追痛防人悲別之心作歌一首并短歌

四三二

天皇乃(スメロキ)　とほの朝廷(ミカト)と
しらぬひの　筑紫の國は
」69ウ

大舩に　まかいしゝぬき
朝(あさ)なきに　かことゝのへ
ゆふしほに　かちひきおり
あともひて　こきゆくきみは
なみのまを　いゆきさくゝみ
まさきくも　はやくいたりて
大王(オホキミ)の　みことのまにま
ますら男の　こゝろをもちて
ありめくり　事しをはらは
つゝまはす　すへりきませと
いはひへを　とこへにすへて
」70ウ

しろたへの　そておりかへし
ぬはたまの　くろかみしきて
なかき氣(ケ)を　まちかも恋ん
はしきつまらは

四三三　ますらおのゆきとりおひて出ていけは
別を丶しみなけきけんつま

四三三　とりかなくあつまおとこのつまわかれ
かなしくありけんとしのをなかみ

右二月八日兵部少輔大伴宿祢家持

陳私拙懐一首并短歌

四三六〇　天皇乃(スメロキノ)　とほきみよにも
おしてる　難波のくに丶
あめのした　しらしめしきと
いまのをに　たえすいひつ丶
かけまくも　あやにかしこし
かむなから　わか大王(オホキミ)の
うちなひく　春のはしめは
やちくさに　はなさきにほひ
やまみれは　見(ミ)のともしく
かは見れは　見のさやけく
ものことに　さかゆるとき**と**
めしたまひ　あきらめたまひ
しきませる　難波の宮は
きこしをす　四方のくにより
たてまつる　みつきの舩は
ほり江より　みをひきしつ丶
あさなきに　かちひきのほり
ゆふしほに　さをさしくたり
あちむらの　さわき丶ほひて
はまにいて丶　海原(ウナハラ)みれは
しらなみの　やへおるかうへに
あまをふね　はららにうきて
おほみけに　つかへまつると

71オ

をちこちに　いさりつりけり
そきたくも　おきろなきかも
こきはくも　ゆたけきかも
こ丶みれは　うへし神代ゆ
はしめけらしも

四三六一　桜花いまさかりなり難波の海
おしてる宮にきこしめすなへ

四三六二　海原のゆたけき見つ丶あしかちる
なにはにとしはへぬへくおもほゆ

右二月十三日　兵部大輔家持

倭文部可良麿二月十四日常陸

71ウ

72オ

72ウ

國部領防人使大目正七位上息長
真人國嶋進歌数十七日但拙劣
歌者不取載之

四三七一　あしからの　みさかたまはり
かへりみす　あれはこえゆく
あらしをも　たしやはゝかる
不破のせき　こえてわはゆく
むまのつめ　つくしのさきに
ちまりゐて　あれはいはゝむ
もろ〳〵は　さけくとまをす
かへりくまてに

為防人情陳思作歌一首并短歌

四三九八　大王乃　みことかしこみ
つまわかれ　かなしくはあれと
大夫の　情ふりおこし
とりよそひ　門出をすれは
たらちねの　はゝかきなてゝ
若草乃　つまはとりつき
平らけく　われはいはゝん
好去て　早還来と
まそてもち　なみたをのこひ
むせひつゝ　言語すれは
群鳥の　いてたちかてに

」73ウ

一三〇

と、こほり　かへりみしつゝ
いやとほに　國をきはなれ
いやたかに　山をこえすき
あしかちる　難波にきゐて
ゆふしほに　舩をうけすへ
あさなきに　へむけこかんと
さもらふと　わかおるときに
春霞　しまへにたちて
たつかねの　悲みなけは
はろ〳〵に　いへをおもひて
おひやの　そよとなるまて

」74オ

四三九九　なけきつるかも
うなはらに霞たなひきたつかねの
かなしきよひはくにへしおもほゆ

四四〇〇　いへおもふといをねすおれはたつかなく
あしへもみえすはるのかすみに

右十九日　家持作之

陳防人悲別之情歌一首并短歌

四四〇八　大王乃　まけのまに〳〵
嶋守に　わかたちくれは
はゝそはの　はゝのみことは
みものすそ　つみあけかきなて

」74ウ

ち、のみの　ち、のみことは
たくつの、　しらひけのうへゆ
なみた、り　なけきのたまはく
かこしもの　た、ひとりして
あさとての　かなしき吾子
あらたまの　年のをなかく
あひみすは　こひしくあるへし
今日たにも　こと、ひせんと
をしみつ、　かなしみませは
若草の　つまもこともも
をちこちに　さはにかくみゐ

」75オ

うつせみの　よのひとなれは
たまきはる　命もしらす
海原の　かしこきみちを
しまつたひ　いこきわたりて
ありめくり　わかくるまてに
たひらけく　おやはいまさね
つ、みなく　つまはまたせと
すみのえの　あかすめかみに
ぬさまつり　いのりまうして
なにはつに　舩をうけすへ
やそかぬき　かこと、のへて

」76オ

春鳥（ウクヒス）の　こへのさまよひ
しろたへの　袖なきぬらし
たつさはり　わかれかてにと
ひきとゝめ　したひしものを
天皇の　みことかしこみ
たまほこの　みちにいてたち
をかのさき　いたむることに
よろつたひ　かへりみしつ、
はろ〳〵に　わかれしくれは
おもふそら　やすきもあらす
こふるそら　くるしきものを

」75ウ

四四六五

喩族歌一首并短歌

ひさかたの　やまのとひらき
たかちほの　たけにあまりし
すめろきの　かみのみよゝり
はしゆみを　たにきりもたし
まかこやを　たはさみそへて
おほくめの　ますらたけ男（オ）を
さきにたて　ゆきとりおほせ
山河を　いはねさくみて

」76ウ

あさひらき　わをこきてぬと
いへにつけこせ

ふみとほり　くにまきしつゝ　すめらへに　きはめつくして
ちはやふる　神をことむけ　つかへくる　おやのつかさと
まつろへぬ　ひとをもやはし　ことたてゝ　さつけたまへる
はきゝよめ　つかへまつりて　うみのこの　いやつき〳〵に
あきつしま　やまとのくにの　みる人の　かたりつきてゝ
かしはらの　うねひの宮に　きく人の　かゝみにせん(消・を)と
みやはしら　ふとしきたてゝ　あたらしき　きよきその名そ
あめのした　しらしめしける　おほろかに　こゝろおもひて
すめろきの　あまの日継と　むなことも　おやのなたつな
つきてくる　きみの御代〳〵　大伴の　宇治と名におへる
かくさはぬ　あかきこゝろを　ますらおのとも

」77オ　」77ウ

四四六六　しきしまのやまとの國にあきらけき
名におふともの男こゝろつとめよ

四四六七　つるきたちいよゝとくへしいにしへゆ
さやけくおひてきにしそのなそ

右縁淡海真人三舩讒言出雲守
大伴古慈悲宿祢解任是以家持
作此歌也

」78オ　」78ウ

〔重ね書きによる訂正〕

1オ8 **の**――モト「と」。
6オ5 **新**――原字不明。
6 **も**――原字不明。
ウ5 **譲**――原字不明。
7オ2 **みに**――原字不明。
8 **に**――原字不明。
9オ3 **古**――原字不明。
10オ3 **また**――モト「た」一字。
ウ9 **ぬ**――原字不明。
12オ8 **八**――モト「ハ」。
15ウ7 **の**――原字不明。
16オ7 **雲**――原字不明。
17ウ4 **こ**――原字不明。
19オ5 **な**――原字不明。
20ウ5 **尓**――モト「尓」。ナゾリ書キ。
8 **酌レ桂**――原字不明。
ウ10 **伊**――モト「は」。
57オ1 **ナ**――モト「ナ」。ナゾリ書キ。
59ウ4 **な**――原字不明。
60オ8 **も**――原字不明。
61ウ1 **首**――原字不明。
63オ8 **官**――モト「官」。ナゾリ書キ。
9 **ミ**――モト「コ」カ。
10 **サ**――モト「カ」。
64オ3 **惜**――モト「お」カ。
66ウ11 **舶**――モト「舩」カ。
67ウ8 **手**――モト「手」カ。
68ウ3 **舶**――原字不明。
11 **詔**――原字不明。
69オ3 **か**――原字不明。
ウ6 **家**――モト「大」。
70ウ6 **ま**――モト「ま」。ナゾリ書キ。
71ウ10 **と**――原字不明。

26オ11 **と**――モト「に」カ。
27ウ1 **ま**――モト「丶」(書キ止シ)カ。
3 **日**――モト「日」。ナゾリ書キ。
28ウ8 **そ**――原字不明。
29オ10 **き**――モト「き」。ナゾリ書キカ。
32ウ6 **逸**――原字不明。
35ウ8 **苦**――原字不明。
38ウ6 **みつ**――モト「みつ」。ナゾリ書キ。
8 **皇**――原字不明。
40オ5 **天下**――モト「天下」。ナゾリ書キ。
41ウ8 **ん**――モト「し」。
43オ3 **ち**――原字不明。
10 **しく**――モト「し」一字。
48オ5 **年**――原字不明。
55ウ6 **潜**――原字不明。
56オ4 **携**――モト「携」。ナゾリ書キ。
5 **暁**――モト「暁」。ナゾリ書キ。
73オ8 **ま**――モト「ら」カ。
74ウ9 **守**――原字不明。
75ウ1 **ウ**――モト「う」。
ヒ――モト「ひ」。
78オ2 **ろ**――モト「ろ」。ナゾリ書キ。